狂兵でしょうか？いいえ、漂流者です

三途リバー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドリフターズ×ＦＧＯ置いてけ!!

ドリフターズ×ＦＧＯ好きだろう!?

なぁお前ドリフターズ×ＦＧＯの発想はあっただろう!?

とネットの海で咽び泣くことウン年、にっちもさっちも行かなくなってやりました。

以下注意事項

・ドリフターズの物語が完結した設定

・Ｆａｔｅ知識は鼻くそレベル

・タイトル詐欺も良いところ

・オリ設定マシマシ文才少なめ厨二マシ

もし良かったらじゃんじゃんパクってください、そして供給を生み出してください

目　次

狂兵（バーサーカー）でしょうか？いいえ、漂流者（ドリフ）です
1
アレの名は　14
ＹＡＴＴＡ！　21
みんな違ってみんないい　30
Ｃａｌｌ　ｍｅ!?　38
Ｐｅｎｄｕｌｕｍ　ｗｏｒｋ　46
道　57
ゆるぎないものひとつ　63
Ｆｉｒｅ　Ｗａｒｓ　69
燃えよ剣　75

狂兵（バーサーカー）でしょうか？いいえ、漂流者（ドリフ）です

拝啓、お父さんお母さん。

世界の終末まっさかりの今日この頃、如何お過ごしでしょうか。街を包む大火に逃げ惑っているでしょうか？思考放棄してフリーズしてらっしゃるでしょうか？っていうかここ過去の世界だっけ。ということはそちらはごく普通の日常を送っている…？いや、人理だかなんだか忘れたけどそれごと吹っ飛んじゃった…？

いずれにせよ、大変な時にそばにいられない親不孝の娘が言えた事ではありませんがお二人の無事を願って止みません。

……私ですか？いや、まぁ、なんというか……その…

「サンジェルミ！あなた仮にも２０００年前から名の知れた化け物を名乗るなら、あのサーヴァントくらいどうにかしなさいよッ!!」

「ぶっ殺すわよクソガキ。大体アタシは魔術師とは言ってもどちらかと言えば外交とか調停役とかそっちらへんのフォーマルなところの担当なの！そもそも本業は錬金術（口八丁手八丁）！か弱い乙女にメドゥーサなんて大物どうにか出来るわけないでしょッ！」

「もう突っ込む気力もないっ！なんでアンタみたいな役立たずがいて、レフがいないのよぉっ!!」

「うっさいわね！と言うか、なんでアンタこそちゃっかりレイシフトしてんのよ！適正ないから虐められてたんじゃないのォ!?」

「いいい虐められてないわよ!!たたたた単に気の合う友人がいなかっただけで私は別に」

「所長！語るに落ちています！と言うか落ち着いて下さい！サンジェルミ伯も、火に油を注ぐような真似は…くっ!!今は下らない小競り合いをしている場合ではありません！」

……終末世界ぶらり旅、オカマを添えて???

アルバイト気分で出向いた先が爆発でぶっ飛んで、知り合った後輩の女の子が命を失う寸前で。だからせめて、彼女の隣に…手を握っていてあげようと思って。

そうしたら、レイシフトだかタイムスリップだかに巻き込まれて。それで、後輩がデミサーヴァントで、私がマスターで……。

「何一つ分からない…」

しかもカルデアのＤｒ．ロマンと通信が繋がったと思ったら、急に敵性サーヴァントに襲われるし。しかもなんか、明らかに怪しさ満点のオカマが助けてくれるし…

「あなたが分かろうが分かるまいが、そんなの関係ない！これはカルデアの、引いては人類の危機なの！まずはこの男女をぶちのめして、その後さっきのシャドウサーヴァントに反撃！やりなさい、マシュ！」

「誰の資金援助のおかげでカルデアの所長続けられてっと思ってんだ砂利ガキ！」

「それはそれ、これはこれ!!そもそも、時計塔からも独立した勢力であるあなたがカルデアに出向ということ自体が意味不明！それに到着予定時刻を大幅に過ぎても姿を見せず、その間にカルデアは爆発！かと思ったら特異点Ｆにいるし、もう誰がどう考えても黒幕でしょう！」

「お、お化粧とかいろいろ時間かかるのよッ！いいでしょオカマの粗相の一つや二つ、笑って受け流すのが女の器量ってもんでしょ！」

そんな軽口（？）を叩く間にも、先程退けたサーヴァントの攻撃が

ビュンビュンと飛んでくる。束ねた鎖を槍のように唸らせ、こちらの命を刈り取りに来ている。
「はぁっ!!」
しかし明確な殺意を孕んだそれらの攻撃は、マシュに…私のサーヴァントだという後輩によって尽く弾き飛ばされていく。
「マシュ、ありがとう！あのビル街まで頑張って！路地に入り込んで、できる限りあいつを撒くっ……！」
「はい、先輩（マスター）！」

無数の鎖や道を塞ぐ骸骨騎士達を何とかやり過ごし、私達は廃ビルの中へと逃げ込んだ。
一息ついた途端、あまりの怒涛の展開で感じることすら忘れていた疲労が一気に身体にのしかかる。
「はぁっ、はぁっ……」
「大丈夫ですか、先輩？」
荒い息を吐く背中を、マシュが心配そうに摩ってくれる。敵の猛勢にその身を晒し、命を張っていたのは彼女だというのに優しい子だ。
「あり、がと……でもやっぱ、この間どころかついさっきまで一般人だった可憐な少女に、この修羅場はキツいかな……」
「あまりご無理はなさらずに。私は周囲の警戒を行っていますので、何かあればすぐに呼んで下さい」
そう言ってまた駆けていくマシュの背中は、大きくも何ともない。ただの年頃の、華奢で可憐な女の子だ。

「おセンチになってるとこ悪いけど、今のうちに話を済ませるわよ。さっそくだけどオルガマリー・アニムスフィア。デミサーヴァント一体とド素人マスター一人、それにチキン一羽で特異点をどうにかするとか抜かしてたわね、アンタ？手柄欲しさに自殺行為とか、アホなのアンタ？そう言えばアホそうな面してるわね、アンタ」

そう言って服に着いた埃を払い落とす紳士…淑女……いやオカマ。

そう、オカマ。金髪にやたら派手な化粧、言葉と裏腹に落ち着き払った声音という、何から何まで全部怪しいオカマだ。

彼はサンジェルミ伯爵。またの名を、サン・ジェルマン。

中世ヨーロッパから近現代アジアまで、はたまた遥か過去のソロモン王の時代までその名を知られた、歩く世界ふしぎ発見大図鑑である。魔術のまの字も知らず今日まで生きてきた私でも聞いた事がある超大物だ。

なんでもこの人はカルデアや時計塔？とかいう所には所属しないフリーの魔術師らしく、かなり自由な行動で有名らしい。

「じゃあどうしろって言うの！文句があるなら代替案を出しなさい、代替案を!!私は、手ぶらでここから帰る訳には……！大体、さっきも言ったけどあなたが黒幕なんでしょそうでしょう!?こんなところにまんまと私達を連れ込んで、纏めて始末しようと……」

代替案を出せと言ったり黒幕だと断じたり、未だパニックから戻ってこれていないのはじんりほしょーきかんかるであのえらいひと、オルガマリーちゃん。名字いれると長ったらしいので私は所長と呼んでいる。

「カルデア潰してアタシになんの得があるの？１００年後には途切れる人類、その中には当然アタシも、アタシの領地の人間も含まれる。それを是正し救うためのカルデアに、アタシがいくら注ぎ込んでやったと思ってんの？大枚はたいておまんま食べさせて、あやし育ててきたカルデア潰して、なんの意味があるの？アタシが援助してやんなかったら、シバだのカルデアスだのあんな金食い虫が今の今まで息してる訳ないでしょバァカ！ほっといても潰れる代物を、わざわざ育ててから台無しにする必要ないでしょバァカ!!少しは考えてから物言

いなさいバァカ!!」
「うっ…ぐぐぐぐ……」
　１００年後の人類に自分を数えてたり、領地とか現代じゃ的外れな単語が飛び出したり、言葉だけ聞けばとんだ詐欺師かイカレと思う。だがその声音は妙に力強い。不審なオカマに違いはないが、何故かこの人の言葉は胸にすとんと落ちていく。
「アタシがこの特異点にいるのは、我が唯一の魔術のおかげ。世界を渡る無二の秘術、アタシをサンジェルミたらしめるノウブル・ファンタズム・第七光線の――」
「あなたの大ボラはもう良いわっ！あぁもう、とにかく！サンジェルマン伯爵！あなたは我々カルデアの味方で良いの!?」
「だからさっきからそう言ってんでしょ！カルデアに到着した時にはもうあの爆発騒ぎが起きてて、ヒョロガリポニテ医者からアンタらの引率頼まれたから来てやったのよ！このアタシが直々に！それを全く、礼儀がなってないったらありゃしない！」
「じゃあ、ジェルミさんはＤｒ．ロマンに頼まれて来てくれたカルデアからの援軍ってこと？」
「じぇ、ジェル……一般ピーポーの癖に肝座ってるわね、橙頭…。リツカ・フジマルとか言ったかしら？そういう認識で構わないわ。ただひとつ、援軍と言ってもアタシはアンタらの為に命捨てられるようなやっすい立場じゃないの。駄々こねてるそこのバカをふんじばって、一刻も早くカルデアに帰還したいのが本音ね。この特異点は異質すぎる。行き当たりばったりで解決出来るような甘っちょろいモンじゃないのよ。でもま、放っておく訳にもいかないのも事実ではある…」
　つまり、こういう事だ。
　ジェルミさんは今日カルデアに出向することになっていたが、たまたま遅刻。そのおかげで事故に巻き込まれずに済み、無傷の状態でカルデア職員達に合流した。
　そこで私達の置かれた状況を知ったＤｒ．ロマンに頼まれて、わざわざここへ来てくれた。

「めちゃくちゃ良い人じゃん!!サンジェルミ伯万歳！」
「オホホホホホ！そうよ！崇め奉り平身低頭で有り難がりなさい！」
「ありがたやーありがたやー」
「そんなオカマの肩持つな藤丸ゥ!!……はぁ、不本意ながらあなたが味方だということは理解しました。こんなゲテモノに借りを作るロマンの神経はまっっったく理解できないけど」
相変わらず所長の毒は止まらないが、ひとまずジェルミさんと対立するとかそういう事態にはならずに済みそうだ。
だが最悪は回避すれど、状況が悪いことには変わりない。そもそも鎖をブンブン飛ばす上に鎌担いで追いかけてくるナイスバディなおねいさんに為す術がなく、マシュに守ってもらって這う這うの体で逃げてきた訳だし。
ジェルミさんは戦闘要員ではないらしいので、戦力的にはマシュ一人におんぶにだっこなのは変わらない。
よしんばアレを撃破したとて、この特異点をなんとかしようにも成すべきことすら分からない。
「いつまでもここに隠れてる訳にもいかないしなぁ…うーん、なんか良い打開策がパッと降ってこないかなぁ…」
「んー……んんんん～～～……」
唸るジェルミさん。だがそれは知恵を振り絞るというよりかは、どちらかと言うと迷っているといった様子である。何かを天秤にかけているような、一世一代の賭けに打って出る直前のような。
「……無い……こともないわよ。打開策。というかこれをアテに、アタシに救援頼み込んだんだろうし。ん～…でもやっぱ、ねぇ……」
たっぷりの沈黙の後、絞り出されたのは苦渋に満ちたそんな言葉。
「な、あなたねぇ！そんな策があるなら始めから言いなさい！何勿体ぶってるのよ！」
「なに、こと自体は単純な話だわさ。召喚すんのよ、英霊（サーヴァント）を」

コンクリートの地面に、ジェルミさんが魔法陣をガリガリと描きこんでいく。その右手に握られているのは真っ赤な口紅、床とジェルミさんが間接キッスである。
『何か描くもの……ちっ、アレスタもフラメーも、肝心な時いないわねッ』
悪態を吐きながら口紅を取り出したジェルミさんを、ゴミを見る目で所長が見下ろしていたのはまた別の話。
「上手く、いくでしょうか…」
私の隣には、盾を手放し不安そうに手をにぎりしめるマシュ。先程まで骸骨どもをぶん殴って散らしていた獲物は、ジェルミさんが描く魔法陣の中心部に突き刺さっている。
「ジェルミさんを信じよう。ここはもう、彼…いや彼女？あぁもうめんどくさい、とにかくジェルミさんの策に乗るしかないよ。いつまでもマシュにだけ戦わせる訳にはいかないしね」
落ち着かせる為にそっと頭を撫でると、僅かにその体の震えも収まり始める。
「先輩…私、強くなります。召喚される英霊の方と共に、先輩を、皆さ

んをお守りできるよう、必ず…」
「…うん。私も、強くなるよ。マスターとしての強さってイマイチ分かってないけど、それでもやっぱり何か出来ることをしたいから。私は、マシュと、これから来てくれる人に恥ずかしくないマスターになる」

知らずのうちにマシュと固く手を握りあいながら、私の意識はつい数分前に立ち戻る。ジェルミさんが提案した、打開策の事に。

『いやね、私今持ってるのよ。確実に狙ったお目当てのサーヴァント引ける触媒。そりゃもうこれで来なかったらうそでしょアンタってレベルの縁深いやつを』
『ならさっさとそれ出しなさいよ！そのサーヴァントと契約して、少しでも戦力を…』
『ただし！かーなーり怪しい部分がある!!』
ジェルミさんいわく、彼は日本において実在し、それなりの偉業を成し遂げたひとかどの英霊であるらしい。有名所には二、三歩劣るがそれでも貴重な戦力には変わりない。それに、多少英霊として格落ちだとしても本人の力量自体はサンジェルミのお墨付きだと言う。
『なんであなたがそんなもの持ってるのかはともかく…何を迷う理由があるの！とっととその格落ち英霊を呼びなさい!!』
『急かすな馬鹿！問題はここからなのよ馬鹿！良いこと!?私が今持っている触媒は、あんたたちの言う史実とはかけ離れた世界で受け取ったものなのよ！』
ここではないどこか。
今ではないいつか。
この世のだれもが知ることの無い、分かたれた世界に飛ばされたその男は、文字通り世界を救い、そして英雄として祭り上げられたらしい。
『つまり、異世界転生…？しかもそれって、その男だけじゃなくてあな

たも異世界に行ったってことよね？あなた、格好だけでなく頭の中もイカれてるの…？』
『だァレが面白い格好のイカれたオカマだクラァ!!聖杯だの英霊だの人理だの、そんな面白ワード連発してる世の中で異世界如きでグダグダ言ってんじゃねぇぞクラァ!!』
　そりゃまあ、確かにその通りである。
『アタシはあのおバカな王様を間近で支えてたのよ。ったくあの首狩り大将、散々人を往生させといて戦争終わって暫く経ったら安らかな顔でぽっくり逝って、後処理含めてアタシらがどんだけ苦労させられたと……ま、ともかく。ここまで言ったらそこの頭硬そうな鼻水垂らしでも分かるでしょッ』
『だ、誰が泣き叫んで鼻水垂らして若干漏らしかけてる頭硬そうな女よッ!!』
『語るに落ちてるよ、所長…』
『ぬぐぐ……ふんッ！大体察したわよ！召喚に成功したとして、この世界での一英霊として顕現するのか。それとも向こうの世界の大英雄として顕現するのか、見通しが立たないんでしょ！』
　通常、英霊というのはその知名度によって規格付けがなされ、世界的に高名であればあるほど強力な力を引っ提げてこの世にやってくる。らしい。だが件の彼は不確定なのだ。
　こちらの世界で事を成したから英霊なのだ。
　それともあちらの世界で伝説になったから英霊なのか。
『いやでも、こっちで召喚するんだから、こっちの世界の人に知られてる状態で来てくれるんじゃないの？』
『そうとも言いきれないのよね、これが』
　そう言いながらサンジェルミがゴソゴソと懐から取り出したのは、飾り気の一切ない武骨な鉄の塊だった。
『日本刀の…鍔？』
　それは私にとっては見慣れた…とまではいかないが、写真やら創作物やらでよく見かけるもの。王様の遺品というから相当派手な装飾がされてるのかと思ったが、全くそんなことは無い。黒一色の鉄地に

刻み込まれた大小無数の傷からは、優美さとはかけ離れた実用性が見て取れる。
『これはあの子を狂信的に慕っていたドワーフ族が後生大事に保管していた、云わば伝説の証明。物語の英雄が、自分達の祖先と戦場を共にしたという絶対的な確信の元３００年以上保管されていた特級遺物よ』
込められた想いの桁が違う。
それこそ世界の違いなんていとも容易く乗り越えるくらい、多くの人が彼を慕い崇めて憧れたのだという。

「アオハルしてるとこ悪いけど準備出来たわよ。後はリツカ、アンタがあの子を呼び出して」
ジェルミさんの言葉で、急速に意識が浮上する。手渡されたのは、虹色に光る綺麗な小石と例の鍔。
「これは最終警告よ。ここから先、何が起きるか分からない。あの子がいつの状態で召喚されるのか…こちらの世界の彼か、あちらの世界の彼か、はたまた歪に混ざりあった、可能性としての彼か！それらのうちどれを召喚したとしても、この特異点の修復を保証するものではないわ。彼ほど馬鹿で、阿呆で、素直で愚直で、そして芯の通った人間をアタシは知らない！世界がどうなろうが彼は彼の道を行く。敵味方が誰であろうが彼は死地へと突っ込んでいく！御して見せなさい、リツカ・フジマル。私が知り得る限り最高に空気の読めないお馬鹿さんを」
「うん。やってみるよ。人類の未来とか、そんな大仰な実感は湧かないけど…私は、ここにいるみんなと一緒に帰りたいから」
（ま、ホントは向こうの彼を呼べば９割問題解決なのよねぇ。黒王ぶち殺した英霊なんて、無敵そのものじゃなくって？変に期待させて後からギャーギャー言われても面倒だから黙っとくけどネ）
深呼吸を繰り返し、精神を統一させる。大丈夫、私は大丈夫。なんたってじんりほしょー…しゅうふくだっけ？とにかく魔術を扱って

るカルデアに、補欠とはいえお呼び出しをもらったのだ。
大丈夫、大丈夫。
「藤丸」
と、後ろからトゲトゲしいお声。
「これだけは言っておくわ。私は、あなたの死を背負うなんて真っ平ごめんよ。そんな重荷、私に投げておっ死んだら一生許さないから」
「ぷッ……くくくくっ…」
「な、何笑ってんのよ！とっとと戦力引いてきなさい、この補欠枠！」
なんて乱暴な気遣いか。誇りや責務なんかじゃない、不格好でぶっきらぼうな優しさが、確かにオルガマリーにはあるということか。
（あぁ、勿体ないなぁ）
マシュも、所長も、それにジェルミさんも。
こんな終末世界だからこそ出会えて、一緒にいれるだなんて。
（いや、なにが勿体ないもんか）
これからだ。ここからなのだ。
友達になって、馬鹿やって、腹の底から笑いあって。
そんな未来は、今から自分達で掴み取るのだ。
魔法陣の中央に聳え立つ盾に、手をかざす。石をはめ込む。そして、鍔を強く握り締める。
「っ……ぐぅぅぅっっっ……！」
途端、荒れ狂う光の奔流が尾を引き出した。
嵐のごとき激しさで、乱気流のように光が周囲へ散っていく。
鍔を握った手は焼けるように痛み、弾き飛ばされそうになる。
「ま、だ、ま、だぁ……!!」
マシュは一人戦ってくれた。今日知り合ったばかりの私を信頼し、たった1人で戦場に突っ込んで守ってくれた。
所長は半狂乱になりながらも自分に出来る限りの指示を飛ばし、恐怖を抑えて立ち上がってくれた。
「お、願い……答えて…応えて……!!私に、応えろォッッッ!!」
吼えた、刹那。
青い光は、緋色に変わる

「なッ!?ちょ、ちょっとサンジェルマン伯!これはどういうこと!?カルデアにあった史料では、召喚時にこんな現象は……!」

「あらヤダ来たんじゃない?来たわよねコレ?星5すっ飛ばしてそもそもステータス表記ごと違うような別世界からUR来たんじゃない!?」

「なにをブツブツとわけわかんないことを!こ、これじゃ藤丸が……!」

「先輩、危険です、この魔力反応は……!」

痛い、痛い痛い痛い熱い熱い熱い苦しい辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い辛い!

でも、それでも退くわけにはいかない。

ここで退いたら、諦めたら。それは即ち、負けなのだ。

負け。

そんな、そんな、そんなものは認められない。私達の旅(いくさ)は、始まってもいない――!

脳みそが焼き切れそうな痛みの中、1つの単語が私の思考を支配した。

「来い!!ドリフタァァァァァァァッッッッッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

光が収まった時、そこにいたのは1人の男。
血よりも赤く、緋よりも紅く、生命が形を成したのかと思うほどに力を漲らせる眩しい武者。
「なぁんが、美事な口上ち思うたら年端もいかぬおなごでなかが！じゃっどん良か！良か面魂ぞ！おなごじゃろうがなんじゃろうが、棒でん槍でん担いで疾走るち心地よか気勢ぞ！」
私達の旅はここから始まった。
幾つもの絶望が待ち受けて、数え切れない哀しみに包まれて。
「共に征くもんにおいはなんでんしちゃる。おいの命ばくれちゃる。おまぁは良か、良か兵子じゃ！おいの命ば預けるにたる、良か大将じゃ！」
それでも、そんなもん知ったことかとばかりに全部蹴散らして捻り潰してぶちのめす、そんな滅茶苦茶な私達の旅が。
「島津中務少輔豊久、推参!!……といあえず、首じゃ。功名首ば奪らんでは、おいのいる意味なぞなかろ？」
「えっこれ大丈夫？話通じるタイプ???」
いやほんとマジで。泣きたくなるくらい滅ッッッッッ茶苦茶な旅が。

アレの名は

「島津ねぇ…どうせ島津なら　四兄弟ｎ「ひとォつ!!」ら次男とかもっと有ｍ「ふたァつ!!」いなのがよかったわね。この期に及んで贅沢は言わないけど、いくらなんでも玉砕だけの一発屋っていうのは「みっつぅ!!!」あぁもううるっっっっさい!!!少しは静かに戦えないのバーサーカー!?」

なんだこれ。

召喚に成功してからはや小一時間。この特異点に飛ばされた理由や、先程襲撃してきたランサーのことなど諸々の事情を話したら

『良か！』

の一言でこちらから打って出ることになっていた。

何が良かなのか、微塵も分からない。

もっと分からないのは、策も補給もなしに連戦して苦戦のくの字もなく首を奪りまくっていることだ。なんか時々キェーだのチェーだの獣の咆哮もかくやという叫び声が轟くし。コワイ、シマヅコワイ。

マシュは引き笑いしてるし、所長は話し遮られて怒り心頭。唯一ジェルミさんだけはオホホトヨちゃんったら相変わらずなんだからもーとか久々に会う親戚の子を見守るおばさんと化している。

なんだこれ。

「おうい、ますたぁ！」

３分と経たず骸骨を殲滅した豊久さんが、ニコニコ顔で戻ってくる。さっきまでなまはげ顔負けの形相を披露していたとは思えない、それはもう爽やかで満足気な顔だ。

「おおおお帰りィ」

「ゴゴゴクロウサマデス…」

「久方振りの戦じゃっどん、思うたほどに身体はなまっちょらん。むしろ調子がよか！さあづぁんとちうんはすごかのぅ！」

「サーヴァントは英霊の全盛期の姿でもって顕現する。そういうお約束だからね。その上今のトヨちゃんは、あの世界まんまの力じゃないの。あなたがやらかした無茶の数々が逸話となり、伝説へと昇華さ

れ、それが巡り巡ってあなたの力となっている。あっちでの功績を考えれば、今のトヨちゃんぶっ壊れよ？」
　積み重ねた功名首の数だけ強くなるとか怖いわ。世界を救ったとは聞いたけど、実際何やったんだマジで…
「えんずとやりおうちょる頃は妖ん術に手ば焼いたが、今度ぁおいが不思議な力ば使うとは。分からんもんじゃのう」
「ちょっとバーサーカー!!」
「ばぁさぁかぁとはおいのことか、おるがま」
「おるがま!?!?私の名前はオルガマリー！オルガマリー・アニムスフィア!!!」
「おるがまりぃ、あにすむ、あにむす、あむ……で、なんじゃおるがま」
「きぃぃぃぃ!!!サーヴァントは現代の知識に適応出来るんじゃないの!?なんなのよこの猿頭!!」
「あー、まぁこういう子なのよ、ごめんあさーせオルガマ・アニムスさん」
「きぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!」
「そいを言うなら、おいもばぁさぁかぁなどという名ぁではなかど」
「どっから！どう見ても!!バーサーカーでしょうが、あなたのクラス!!!」
　バーサーカーとは、生前に発狂したり、狂気的な伝説を残している英霊が該当するというクラスだそうな。「狂化」という特性によって、基本能力を大幅に強化する代わり、一部の技術や技量が使用不可能になったり、正常な判断能力を失ってしまうという諸刃の剣。常に全力で暴れ回るため、魔力の燃費が悪くマスター殺しと言われてるらしい。さっき所長が言っていた。
　まぁ確かに豊久さんは若干ネジ外れてるなってところはあるし、該当する部分も多いとは思う……が。
「豊久さんはバーサーカーじゃないと思う」
「はぁ!?あの戦いっぷり見てどの口が言うのよ！」
「うーん…上手く言葉に出来ないんだけど…なんて言うかこう…狂った人の戦い方って、もっと無造作じゃない？」

「あら、素人の癖に良い着眼点じゃないリツカ」
珍しく心底驚いたといった様子で、ジェルミさんが目を丸くする。
え、私そんな凄いこと言った？
「うむ！戦ちもんは皆いかれたもんぞ。戦なんぞやらかす馬鹿（ざこはっ）は、おいもこんオカマも、皆すべからくいかれじゃ。いかれでなくば戦なぞやらん。じゃっどん、いかれと気狂いは違うど。気狂いに出来っのは人殺しじゃ。気ば狂ったもんに、戦は出来ん」
「意外…と言ったら失礼ですが、島津さんは島津さんなりの哲学をお持ちなんですね」
「それなら結局なんなのよ、あなたのクラスは。セイバー？」
「おいは……来た」
「ちょっと、私の話を聞きなさ――「ましゅ!!」ひぃッ!?!?!」
所長の話を遮り、突如として豊久さんが彼女を担ぎあげた。
と、思った時には私の目の前はマシュの大盾で覆われている。
ガキィッ!!!!
金属どうしがぶつかり合う重い音と共に、身体にじっとりと纏わり付くような瘴気が登ってくる。
言い様のない不快感が背筋を這い回った。
「先輩、ご無事ですか!?」
「マシュ、ありがとうっ！所長達は!?」
「所長は島津さんがお連れして回避行動を取っています！サンジェルミ伯もなんとか！敵は二騎、先程のランサーとは別個体です！」

「ほぉ、我が気配を察知し、あまつさえ全力の一撃を躱すか。小娘を抱えたままようやるものよ」
オルガマリーの目の前に現れたのは、筋骨隆々の大男だった。馬2頭に引かせた戦車の上から、長大な戦斧を振り回している。
先程までの骸骨連中とはまるで違う、異質の存在。
頭の中が恐怖一色で塗り潰され、喉が締まる。声が出せない。動けない。
「さぁぅぁんとか、お前」
しかし、真に恐ろしかったのはオルガマリーのすぐ頭上から降り注いだそれだった。
「逃げぃ、おるがま」
どこに逃げ場がある、などとは聞けなかった。
自身の細胞が、神経が、魔術師どころか人間としての本能そのものがオルガマリーに告げている。
黙って従え、と。
「みすみす逃がすと思うて…ぬぐぅぉぉぉ!?!?」
「首置いてけ!・さぁぅぁんとだ!・さぁぅぁんとだろう!!なぁさぁぅぁんとだろお前!」

英霊召喚成功例第四号、真名　島津豊久。
またの名を、カルデアの漂流者（ドリフター）。
後にそう称されるサーヴァントの第一の功名首は、特異点冬木におけるライダー、ダレイオスⅢ世であった。
だが豊久自身がそれを知ることはない。
「奪ったど!」
唯一それを証明できた筈の霊核は、既に首級と共に砕けている。

カルデアの漂流者

【出典】史実→オルテ吟遊歌　『緋王国盗り物語』

【ＣＬＡＳＳ】ドリフター

【マスター】藤丸立香

【真名】島津豊久

【性別】男

【身長・体重】１８１ｃｍ・７９ｋｇ

【属性】中立・善

【ステータス】筋力：Ｃ　耐久：Ｂ　敏捷：Ｂ＋　魔力：Ｅ　幸運：Ｃ

宝具：ＥＸ

【クラス別スキル】

対魔力：Ｂ

魔法を持たない生身にも関わらず、炎を操る魔女を打ち倒し、死霊を呼び出す剣士を退けたという逸話から第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

騎乗Ａ＋＋

竜騎兵を叩き落としてその乗騎を奪取、大空を駆けて竜の首を落とした伝説から本来騎乗スキルでは乗りこなせないはずの竜種を例外

的に乗りこなすことが出来る。

【保有スキル】

功名餓鬼：Ｂ＋

敵の能力が高ければ高いほど、自身の魔力、幸運以外のステータスに補正がかかる。ただし敵対者が女性の場合、このスキルは適用されない。

狂奔：Ａ＋

人を戦さに駆り立てる能力。たとえ本来争いを好まない温和な種族、気弱な人種であろうともその檄に触れればたちまちに勇猛無比な死兵と化す。ただしドリフターの元から一定以上離れたり、時間が経過するとその効力は薄れる。

破天：ＥＸ

■を打ち殺したことから得た能力。ある定理に則って行動するサーヴァントに即死特攻を持ち、超常的存在に対してもその特性を無視して攻撃を加えることが可能。

御世違えども法度違わず：Ｃ＋

敵対サーヴァントによる弱体化、特攻を受け付けない。ただし制約として、いかに戦力差があろうとも女性サーヴァントを即死させる事ができない。これは破天スキルによって得られた即死特攻も打ち消す。（致命傷を与えること自体は可能であり、要はとどめを刺すことが不可能）

尖兵にして御大将：Ａ

集団戦闘の際、敵軍の注意を自身へと集中させるという縛りと引き換えに自勢力全員の全ステータスを二段階上昇させる。ドリフターが死亡した場合、一定時間味方のステータスの上昇率が爆発的に増加する。

【宝具】『■■■■■■■■■』

【Ｗｅａｐｏｎ】『無銘・波平（なみのひら）』

ドリフターの生国において鍛たれた野太刀。武骨な量産刀だが、打撃にも使える長大な柄、身の丈ほどもある刀身、そしてなにより一騎当千たる証の朱鞘と持ち主に最適化されている。吟遊歌上では二度の破損を経て、ドワーフの手によってオリハルコン製へと作り替えられたとされる。

【解説】

ここではないどこか、今ではないいつか、ある世界にて語られている建国の王の物語…その主人公にして絶大な人気を誇る英雄、『漂流者』。

彼は遠い異世界から流れ着いた異邦人であったとされ、暴虐非道の人間至上主義帝国を滅ぼし、地を覆い尽くす魔族の大軍を打ち払い、世界初の多部族連合統一国家を成したという。

「義に厚く、理を悟り、機を見るに敏、されど諾としてそれに従うことを拒絶する炎のような快男児」と謳われている他、オルテ国民の勇猛さを表す『オルテヘゴ』の気風を作り、名付け親となったのは彼であるという説が有力。

物語上では漂流者、漂流王、緋色の王等のみ呼称されるが、史実上の彼のあるがままの姿を遺すことを貴んだドワーフ族の史料には『トヨ』という尊称が記されている。

ＹＡＴＴＡ！

マシュは、襲撃者であるシャドウサーヴァント…恐らくはアサシンとの戦いを有利に進めていた。それもその筈、アサシンクラスとは元来真正面からの戦闘を得手としない。

陰に隠れて不意を打ち、知らずのうちに命を刈り取るからこそのアサシン。

それが豊久の直感によって奇襲を妨げられ、乱戦でもない１対１の戦場に引きずり出された今、その実力の殆どは発揮できていない。

「はぁぁっ!!!」

「ぐ、ギ…」

それを考慮しても、マシュの実力は賞賛に値するであろう。

今日初めて、サーヴァントとしての戦闘どころか戦場そのものを初めて経験した少女である。それが巨大な鉄塊を振り回し、叩き付け、戦局を有利に運んでいるのだ。

「マシュ、あまり距離を開けないで！投げナイフでアウトレンジに逃げられる前に、一気に距離を詰めて叩こう！」

「はい！」

そしてその主、藤丸立香の戦屋としての力は更に驚嘆に値しよう。

瞬時に敵の行動パターンを読み、特性を考察し、対処法を組み立てる。能力もさることながら、その精神性は尋常のものではない。

「せいっ!!」

マシュの鉄盾が、アサシンの体をビルへと押し潰した。黒い粒子が飛び散り、ビルにも亀裂が入る程の一撃だがはまだその動きを止めない。

ならばとマシュも力を緩めず、アサシンを壁にめり込ませる勢いで盾を圧していく。

やがてもがいていたアサシンの力が抜けていき、空に溶ける粒子の色も濃くなっていった。

そこで勝利を確信したのが、マシュ・キリエライトの現時点での限界だった。

「宝具、展開」

「っ!?」

背に走った悪寒に、咄嗟に盾を引いて守りを固めたマシュ。

しかし覚悟した衝撃はどれだけ待ってもやってこない。

はっとして敵の顔を見やれば、黒い影に浮かんだ純白の仮面が侮蔑に歪んでいた。

「しまっ――」

気付いた時にはもう遅い。

黒い包帯で戒められていた巨腕が、マシュの背後に佇む主目掛けて解き放たれている。

わざわざ宝具の発動を宣言したのはマシュに防禦姿勢を取らせるため、硬直時間を取らせるためのブラフであった。

(傍に駆け寄って守る!?いや間に合わない、今から腕を殴り付けても先輩はもう間合いにいる、どうするどうするどうする、どうするッ……)

「なんもかんも一撃に込めい、ましゅ!!!」

刹那、戦場に轟いたのは雷鳴だった。

迷いの思考に呑まれ、空白となっていた本能を叩き起こす撃鉄の如き雷鳴である。

「っ……ぁぁぁぁあッッッ!!」

そうだ。

何を迷うことがある、何を日和ることがある。一秒でも速く、一瞬でも迅く先に仕留めれば良いだけのことではないか。

守る為の盾を頭上に掲げ、それだけでなくマシュはそのへりを刃のように縦へ向けた。

「なにッ!?」
　刃の付かぬ盾のへりとて、サーヴァントの全力をもってすれば断罪の剣と何ら変わりはしない。
「ちぇす、とぉぉぉぉぉぉぉおおぉっっっ!!!!!!!!!!!」
　漏れ出た叫びは雷鳴の加護か、はたまた畏敬の現れか。
　狂奔に背を押された斬撃は、アサシンの頭の天辺から股の下までを切り裂いた。
「お……ぁ……」
「先輩には指一本、触れさせません……!」
　今度こそ霊核が砕け散り、アサシンは粒子となって消滅していった。

「ははぁ、荒削りじゃっどん、良か太刀筋、良か性根ぞ。ますたぁと言いましゅと言い、こん御世にはおなごにも兵子もんがおっどじゃな」
　一度は不覚を取ったとは言え、見事な機転(力技)を見せたマシュに豊久は惜しみない賛辞を送る。
　駆け寄って自らのサーヴァントを抱きしめる主の姿を視界の端に収めながら、豊久は肩越しに問いかけた。
「お前もそうか、あぁ?」
「あら、気づいていたのね」
　言葉と共に虚空から姿を見せたのは、紫艶の髪を揺らす魔女であ

る。
　ライダーとアサシンをけしかけ、必殺の機を伺っていたランサーは目論見を潰されたにも関わらず楽しげに笑っていた。
「見知らぬ顔が増えたと思えば、あなたもあの小娘の使役するサーヴァントですか？お手並みは見事だけれど、主があんなゴミ溜めのような魔力量では底が知れるわね」
　くるりと鎌付き槍を扱くうち、鉄鎖が豊久と彼女を取り囲む。まるで闘技場のように、戦場を構築していく。
「オカマ、２人ば連れて逃げい。こいはおいの首級…と言いたかが、おなご首は手柄にならんの。気乗りせん」
「言われなくったって逃げてるわよ!!あとアンタ、もう男だ女だ言ってらんないからねッ!!英霊と認められて顕現してるんだから女だろうが一級品の手柄首よ!!しっかりバッチリ仕留めなさいよっ！廃棄物の時と同じなんてやめてちょうだい！良い!?フリじゃないからね！」
　答えたサンジェルミは既に遥か後方、近くにいたオルガマリーどころかもう立香達を回収している。見事な逃げ足としか言い様がない。
「島津、さん…！」
「豊久さん！気を付けて、そいつの槍は…」
　サンジェルミの小脇に抱えられながら、必死に声を上げるマシュと何かを口走る立香。豊久の身を案じているのが見て取れるが、直ぐにその声は聞こえなくなった。
「ふふ、自ら捨て石になるなんて健気なサーヴァントだこと。その忠義に免じて教えてあげましょう。我が槍は不死殺し。これで受けた傷は、例えどんな傷も癒す魔術でも決して元に戻る事は無い……。一撃でも受ければ、サーヴァントとしては死んだも同然。泣き喚いて許しを乞うなら今のうちですよ、哀れな捨て石」
　嘲笑うライダーだが、豊久は興味無さげに鼻を鳴らすのみである。
「槍ば引くなら見逃すど。オカマはあぁ言っちょったじゃっどん、やはりおなごの首はいらん。そげなもん誇っては親っ父と伯父上に叱（が）られるわ」

豊久には挑発の意など皆無なのだが、ライダーにとってその言葉は侮辱以外の何物でもない。
女であることを理由に侮られた（無自覚）上にまるで自分が格上かのように見逃してやると言ってのけられた（無自覚）のだ。端正な額に青筋が走るのも無理はないだろう。
「あぁそう、お優しいこと。でもその減らず口、いつまでもつかしら…ねぇ！」
満身の殺意を乗せた刺突が一撃にて脳天を貫かんと地を走る。
だが豊久はそれをバックステップで難なく躱し、追撃の体勢に入ったライダーの土手っ腹に前蹴りをぶち込んだ。
「うガッ!!」
「話の通じんおなごじゃな！嫁ん貰い手ばいのうなるど！」
ライダーの身体が凄まじい速度で瓦礫に突っ込み、土煙が舞い上がる中ようやく豊久が刀の鯉口を切る。あくまでも首を奪るためでなく、襲い来る鎖を迎撃するためである。
「貴、様は……私のコレクションにはいらないわ。生きたまま手足を捥いで皮を剥ぎ、その臓物を未熟なマスターの前にぶちまける！」
『もう聞いてらんない、本人にはその気ないかもしれないけど豊さん相手を怒らせる天才だわ…』
その場に居るはずのない導（ニーハイソックス銀髪ツインテオッパイ眼鏡）師の声が、剣戟の音に混じって響いたとか響いていないとか。
いずれにしても、開戦の号砲は打ち上げられた。
冬木の街に、再び猿叫が轟いた。

背後からは剣戟と、建物が崩れる轟音。
時折爆風がこちらへも届く程の激戦だが、その闘争の気配は徐々に遠ざかっていく。
その現状が認められずに、ジェルミさんに抱え込まれた私はあらん限りの力で暴れていた。
「おろしてジェルミさん!!豊久さんを1人で置いてくなんて、そんなのあんまりだよ!!私がいないと魔力の補給だって出来ないのに…!」
「おだまり!!アンタが居ても足手まといどころかモロに弱点にしかならないわ!サーヴァントと正面切ってやるより、マスター叩く方が遥かに楽でしょ!それに何、トヨちゃんの実力疑ってんの?この期に及んで?」
残酷な正論に返す言葉もないが、理解と納得は別である。私が足手まといという点については申し開きようがないが、豊久さんがいくら強かろうが『絶対』はないだろう。
「でもぉっ…!」
「申し訳、ありません…!私がもっと強ければ…!宝具を使いこなせれば、先輩も島津さんもお守りすることができたのに…!」
血を吐くように言葉を絞り出すマシュの手のひらは、あまりに強く握りしめたせいか朱に染まっている。
マシュは責任感の強い子だ。短い付き合いだとは言え、危ない所を叱咤激励してくれた恩人を見捨てる要因(自分)が許せないらしい。
「マシュ、やっぱりあなた宝具が使えないの!?今の今まで見てなかったからまさかとは思っていたけど!」
豊久さんの殺気に充てられ、放心してジェルミさんに担がれていた所長もいつの間にか復活している。宝具がないサーヴァントなんて、だのなんだの喚いているが正直今はそれどころではない。

「兎に角！離してください、ジェルミさん～～!!」
「イッッダ！手ぇ噛んだわねこのガキャ!!アンタほんと一般人枠!?その我の強さ魔術師向いてるわよ！」
「お陰様で今はマシュと豊久さんのマスターなんで！いーかーせーろー!!」

『なんだいなんだい、とんだじゃじゃ馬娘じゃねぇか。ま、それでこそ手の組がいがあるってモンだ、気に入ったぜ』

「「!?」」
突然響いた声に、驚きでジェルミさんとマシュの足が止まる。ついでに力が緩んで私は地面に落とされた。
「うごっふぇ!?」
離せとは言ったけどもうちょっと丁寧に扱ってくれませんかね!?これでもピチピチの乙女なんですけど!?
「あっはっは、とち狂ったサーヴァント共を同時に相手取るたぁ中々見込みがある連中だとは思ったが、こりゃ面白ぇ！どうだい嬢ちゃん達、オレと契約しねぇか？」
そう言って姿を見せたのは、蒼天のような青さの装いに身を包んだサーヴァント。
「いわゆる共同戦線って奴だ。悪い話じゃねぇだろう？」
牙を幻視するほど獰猛に笑うその顔を見て、私は豊久さんと気が合いそうだなぁどと場違いな感想を持つのだった。

不死殺しを振るいながら、敵を攻め立てながら、それでもライダーは湧き上がる恐怖を抑えることが出来なかった。
（なんだ、なんだ、なんだこいつは――――!!）
四方八方からの髪鎖の攻撃を切り払い、跳ね回って回避し、槍を弾き飛ばす。こちらの攻め手を尽く潰される。そこまでは良い。それなら普通だ。ごく普通の攻防だ。恐れることなど何も無い。
だが、この阿呆は今、槍の攻撃を防ぐ気配すら見せず、全霊をもって飛び込んで来た。
（不死殺しだぞ!?不治の傷だぞ!?何故恐れない！何故守らない!!）
かの大英雄、ヘラクレスとて完全耐性を付けるには至らない我が宝具を前にして防御をとらないなど……最早言葉もない。理解が出来ない。
（こいつは本当に……）
生きた英霊か。
突っ込んできた豊久の頭目掛けて、ランサーは全力の突きを放つ。頭で理解出来ずとも、恐怖で心が雲ろうとも、英霊たる彼女の身体は最適解を弾き出した。
だが、一瞬でも迷ったランサーとハナから命を捨てた豊久との間には、埋めることの出来ない絶対的な差がある。
「チィエオオオオオッッ!!!!」
不死殺しが豊久の頭蓋を刺し貫くより、袈裟に振るわれた野太刀がランサーへ叩き込まれる方が一瞬速い。
人外の膂力、瞬発力、そして死を恐れない…いや、死を受け入れている豊久の袈裟斬りに、ランサーは為す術なく吹き飛ばされた。
「不治の傷ち言っとったかのう。治る傷の方が珍しか、南蛮人の言う

こつはやはい訳ん分からん」
事も無げに言い放ちながら、豊久は刃を返して納刀した。
まさかの峰打ちである。この男、サンジェルミに釘を刺されたにも関わらず徹頭徹尾自身の倫理を貫いている。どこぞの陰陽師が見たら憤死しかねない。
「……」
最も、峯とは言え全身全霊の一刀を喰らったランサーはビルを3つほど突き抜けた先で物言わぬ屍同然と化しているが。
「あぁとんだ骨折りぞ。こうなれば残りのさぁぅぁんとの居場所ば吐かせ、そん首取って行かねばますたぁに顔向けできん！」
自らの身体を、生命を的にして敵の首級をとりにいく。
かつてそう評された男の在り方は、英霊となっても何一つ変わらない。
どこに行っても結局、島津豊久は島津豊久だった。

みんな違ってみんないい

私達の前に現れた青いサーヴァントは自らをキャスターと名乗り、共闘を申し出てきた。彼はこの冬木の街で行われていた本来の聖杯戦争の参加者で、唯一の生き残りだと言う。

「おかしくなった連中を介錯してやるためにあちこち駆けずり回ってたんだが、小一時間くらい前から隠す気もねぇ馬鹿でかい殺気をまき散らす奴が現れてな。気になって様子を見に来たわけだ」

物騒なことを言いながら心底楽しそうに肩を揺らす様子は、キャスターと言うにはあまりにも獰猛だ。杖よりも槍とかの方が似合う気がするこの人…。

「それで、今の今までコソコソと私達の後をつけていたと？随分と品のないサーヴァントだこと」

いつにもまして所長がとげとげしいが、それも無理はないだろう。

キャスターの言葉が真実ならば、この人は私達がサーヴァントに襲われ、豊久さんを置いて逃げるところを高みの見物していたことになる。

傍らに控えるマシュが、僅かに身を固くしたのが伝わった。

「おめぇらが従えてるもう一騎のサーヴァント…ありゃエクストラクラスか？ま、なんでもいいがよ、とにかくあのあんちゃんがビシビシとガン飛ばして来やがったもんで中々出づらくてな。サーヴァントだからって問答無用で首もがれちゃ堪んねぇや。いつもの槍か、せめて剣でも持って現界してりゃあそれも一興だったんだがな」

魔術は本業じゃねぇんだ、などと冗談混じりに首をさするキャスターだが、私は全く笑えなかった。

会話を把握できるほど付かず離れずで尾行され、尚且つ豊久さんはそれに気付いて警戒してくれていた。

不甲斐なさここに極まれり、豊久さんにおんぶにだっこであったと否が応でも突き付けられ、無力感と彼を見捨てる形になった罪悪感が一気に押し寄せてくる。

「私は、また…」
「先輩？」
そうだ。またお前はそうやって守られ、庇われ、長らえる。
「気に病むことはないわよ。今敵サーヴァントとまともに戦えるのはバーサーカーもどきだけ、私達がいた所でサンジェルミが言うように足手まといが関の山よ。キャスターの言い分も理に叶って「駄目だよ」…藤丸？」
思わず零れた言葉は、自分でも驚くほどに低く、そして冷たかった。
「ちょっと、アンタホント少し落ち着きなさい。パンピーがいきなり特異点に投げ出されてパニクるのは分かるけど、さっきまで平気そうだったじゃない。疲れでも出た？ひとまず霊脈の安定した場所探してベースキャンプ作りましょ。あのモヤシヤブ医者と連絡取らなきゃいけないしね」
ジェルミさんの言葉が頭に入ってこない。いや、周りの景色さえもう見えなくなっている。
どす黒い絵の具を心の内側にぶちまけられたかのように、負の感情が際限なく湧き上がって私を塗りつぶしていく。
「ねぇ、駄目だよそれは。それだけは言っちゃいけない。それだけは許しちゃいけない。だってそんなことしたら、認めちゃう。くそったれの運命を受け入れちゃう」
「せん、ぱい…？」
そうだ。駄目だ、駄目なのだ。そんなことしたら、お豊の死は――

――おいは所詮は戦餓鬼。功名求めて這いずる回るが関ん山の、英霊ですらなか一匹の阿呆よ

――じゃっとん奴は違う！人理継続保障機関、フィニス・カルデアマスター藤丸立香は違う！

――おいが貴様相手にがまりばすれば、立香は必ず事を成す

――おいが貴様の首に届かずとも、立香が必ず食いちぎる

――おいがここで死んでも、立香は必ず立ち上がる！

――じゃっで良か。こいで良か、こいが良か

――命捨てがまるは、今ぞ！

「あ」

なんだ、今のイメージは？

記憶？いや違う、私は豊久さんとそんな会話は交わしていない。豊久さんとは今日初めて出会ったんだ、あんな記憶があるわけない。でも知っている、私は知ってる、あの絶望と巫山戯た終わりを私は知っていて、でもそれだけは絶対に認めちゃいけなくて。

「先輩ッ!?!?!」

そこまで思い至った時、脳みそをヤスリで磨かれるような痛みと共に私は限界を迎えた。シャットアウトされていく意識の中で、最後に浮かんだのは私がよく知る人の声。

『殿は、おいが。カルデアんセイバー、島津中務少輔豊久が務めもそ』

極度の疲労からか突如倒れた立香をよそに、オルガマリーとキャスターの話し合いは続けられていた。

マシュは立香の肩を支えながら、いつでも逃走状態に移行できるよう重心を落とす。

キャスターの口ぶりは友好的なものだが、このまま共同戦線構築とはいかないだろう。

事実、彼を見るオルガマリーの目は相変わらず厳しい。

「確かに言い分は理にかなっているとは言ったわ。詠唱の隙が大きい後衛向きのキャスターが、この至近距離まで近付いてきたことと合わせてそれなりに信用はできる。けれど、あなたを全面的に信頼したわけじゃない。それだけの根拠で人類の未来をあなたに賭ける（ディールす）わけにはいかないのよ」

「おー辛辣。で、その心は？」

「はん！英霊ともあろうものが、聖杯を求めていつでもどこでも殺し合うような存在が。殺し合いの準備もせずノコノコ出てくる訳がない。共闘話がご破算になった瞬間に、私達を殺す準備くらいはあるんでしょう？」

言うが早いか、オルガマリーは素早くマシュの前に立ち塞がった。
両手を広げ、キッとキャスターを睨みつける姿は先程まで泣き喚き、当たり散らしていた少女のものとは思えない。
「所長!!」
「マシュ！気を抜かず藤丸を守りなさい！これは行儀の良いお話会なんかじゃないのよ！人を容易く殺める兵器、サーヴァントとの戦いなの！」
「震えを我慢して健気なこった。嬢ちゃんの思いやりにあてられたか？それともあんちゃんの気迫が燃え移ったかい？」
「好きに言うが良いわ。私はここで退くわけにはいかない。ここで過つわけにはいかない。人理継続保障機関フィニス・カルデアが長として――!!」
時間にすれば5秒にも満たない睨み合い。しかし、その一瞬だけで、これまでとは比べ物にならない密度の殺気が総身に叩き付けられた。
「っ、ぐッ…!!」
内臓をひっくり返され、胃の中身を全部吐き出したくなるほど気分が悪くなる。だが今この瞬間、オルガマリーが感じている恐怖はマシュのそれを優に上回るだろう。
これまでの人生ではまず経験のない殺気の源に相対し、それでもオルガマリー・アニムスフィアは立っている。マシュを、立香を、人類の希望を守らんとその身を投げ出している。
その姿は紛れもなく人理の守り手。誰がなんと言おうとも、勇者の姿そのものである。
「ふーん…９０点てとこかねぇ」
重苦しい沈黙を破ったのは、キャスターだった。
杖で肩を叩きながら彼は口笛を吹き鳴らす。
「っ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……!!」
途端に呼吸を乱し、崩れ落ちるオルガマリーとマシュ。その顔は脂汗にまみれ、死人と見紛うほど青白い。特にオルガマリーなど、歯の根は合わず、過呼吸を起こしてもう大惨事だ。

しかしキャスターは決してそれを笑わない。
「ぴぃぴぃうるせぇお荷物かと思ったが、お前さん中々やるな。気の強い女は嫌いじゃねぇぜ」
「なに、えら、そうなっ……」
「落ち着いて深呼吸でもしろって。ま、そりゃ偉えからな。なんたって俺は」
「クランの猛犬」
唐突に、サンジェルミがキャスターの言葉を遮った。その一言を聞いた途端、笑っていたキャスターの声が一段低くなる。
「なに？」
「なにって、そこの小娘の回答に１０点分加点してあげようと思って。詠唱の隙を考慮しない、しかも常に片手を開けているところから見てその魔術はルーンかそこら。ケルト系の魔術ならフィン・マックールあたりもまぁあったかもしんないけど、槍メインで剣にルーンとそんな多彩な変態って言ったらもう、ねぇ？」
「てめぇ…」
蒼き英霊の眼光を前にしても、サンジェルミは涼し気な態度を崩さない。慣れっこだというように、余裕たっぷりに指を鳴らした。
「マスターも失い、因果逆転のチート武器も持たないんじゃあそりゃあ聖杯戦争を勝ち抜くなんて出来ないわよねぇ」
彼我の戦力差は分かっていようにも、サンジェルミは挑発的な態度を崩さない。その奇っ怪な姿形から失念されがちだが、彼は恒久の時を生きると噂され、事実異世界にて島津豊久と邂逅している正真正銘の怪物。人智を超えた存在に、片足どころか腰までどっぷり浸かっているのだ。
「あなたはアタシ達を試してる口ぶりだけど、その実そうじゃない。あなたはアタシ達と手を組みたくて仕方がない！さぁどうするのアルスターのクー・フーリン！アタシ達と手を組むか！それとも勝ち目のない戦いにノコノコ出向いて玉砕するか！あなたのお話、聞いてあげてもよくってよ!?」
錬金術師、サンジェルミ伯爵の面目躍如。

芝居がかって、自信たっぷりに言い切るその姿からは確かな威が滲み出ていた。
「ぷっ……はははははは!!!申し分ねぇ！満点だ！こりゃあ一本取られちまったなぁ！」
先程までの殺気を霧散させて、楽しくて堪らないといった風に笑うキャスター。その姿はに、マシュとオルガマリーも呆気に取られるしかない。
「偶にはマトモな戦いに呼ばれねぇかと思っちゃいたが、こいつは思わぬ僥倖だ！真っ直ぐなマスターにそれに応えるサーヴァント！恐怖を抑え込めるケツ持ちに得体の知れねぇオカマと来た！いいねぇ、是非ともあんたらと一緒にあがりてぇもんだ！」
「げ、言質取ったわよォ～……」
へたり込むサンジェルミと笑い続けるキャスター。眠りに落ちるマスターに代わり、マシュの口から例の言葉が溢れ出る。
「なんですかこれ…」

夢を見ていた。
遠い過去の夢。どうしようもなく苦しくて辛くて、それでもそれを

容易く上回るくらい楽しかった、まさに夢のような日々のこと。
彼はいつも1人で暴れて、自分のやりたいことを貫いて、やりたくない事は梃子でも動かずやらなくて。仲間たちもそれに呆れながら、時には激怒して武器を振り回しながらもそれを心地よく思っていて。
皆、彼が大好きだった。勿論私も。
誰もが彼に助けられ、守られ、その暖かさに救われていた。
そう、最後の最後まで。
「目が覚めた？」
「……うん。護衛ありがとね」
「しかしだらしないわね、寝ながら泣きべそかいて目を真っ赤にして。とんだザマだわ」
「ふふ、ごめんごめん。でもなんだかんだ言って付いてきてくれる■■■好きー」
「当たり前でしょうが。あの時アイツに付いていき損ねた私が、今度はあなたの元からも離れたら……あぁ嫌だ、考えただけで頭蓋骨が痛んできた。って、そんな事どうでも良いのよ。ほら行くんでしょ、マスター」
「そうだね、征こう。征って、全部を否定しよう。彼を犠牲に守られた世界を、ひとつ残らず丁寧に壊して、そうして彼に教えてあげよう」
この世界も、私達も。あなたに守られるだけの価値なんてなかったんだよって。

Ｃａｌｌ　ｍｅ!?

無機質な白い壁、白い床。
まるで生命を感じさせないような通路の前に、豊久は立っていた。
あの時と、何も変わらぬ不気味な通路である。
「お、前……」
そして眼前の男も、記憶の中と何一つ変わらない。
関ヶ原の大戦さ、烏頭坂での捨て奸の後にまみえたその時ままの姿である。
「…薩摩に帰すち、そげん訳ではなさそうだの」
不思議なことに、それだけは確信を持っていた。
なぜなら豊久は死んだからである。戦場でではない。火矢に囲まれた寺ででも無い。
廃城の近くの長閑な丘の上で、戦友に看取られて穏やかに死んだのだ。
「お前は誰だ。なんだったのだ。おいを、何故ここへ呼んだ。捨て奸ではなかったのか。おいが戦場で命ば捨てがまるんは、運命ではなかったのか」
豊久は、マモン間原の戦いで『理由』を、己が果たすべきことを悟ったと思ったのだ。だがその実、彼は生き残った。土方に救われ、直に拾われ、生き残って黒王を討った。それが成すべきことだったのか？
「……」
男は答えない。ただあの時と同じように、手元を素早く動かすのみだった。
「！」
やがて、豊久の身体から光の粒子が立ち上り始めた。いや、少し違う。豊久の身体が、粒子になっているのだ。
身体が軽くなっていく感覚と共に、思考もだんだん霞んでいく。
これが死の感覚…いや、それは一度経験した。兎にも角にも、己がここで終わるのだという事だけは分かる。

呼吸を2つ3つするうちには、もう豊久の意識はほとんど消えかけている。ぼんやりと、ついぞ果たし得なかった伯父との約束が頭にチラつく。

『待っておるぞ豊久ぁっ!!待っておるぞ、薩摩で!!死んだら許さぬぞ、豊久ぁっ!!』

(こいが走馬灯か。……骨の一本でん…いや、鎧兜の一部だけでん薩摩に帰れれば、伯父上にも申し訳ば立つんだがの。仕方なか。化け物ん総大将が首級で、勘弁したもんせ)

深い眠りに落ちていくように、頭に漆黒の帳が落ちる、その直前。

「君自身は何を望む。島津家久が子ではなく、島津義弘が甥でもなく。島津豊久自身は、何を願う」

何を戯けたことを。

決まっているだろう、そんなもの。

「おい、は――――――――」

「つまらん！遠当てされてはなんもできん！与一がおったら話ば違ったんじゃが…」
珍しく愚痴を吐きながら、豊久は霰の如く飛来する文字通りの剣雨を躱し続けていた。
ランサーを打ち倒して情報を聞き出そうと歩みよった矢先、視認も難しい遥か彼方からの狙撃で彼女は周囲の瓦礫ごと消し飛んだ。
地形を変えるほどの大爆発に、直や提督が操っていた未来の時代の産物かと思ったがどうやら違う。
視認する限り、次々に撃ち込まれてくるのはどうやら弓矢…いや弓剣である。
「鬱陶しか！」
通常の剣に混じって、どろりとした不快な殺意…魔力、というべきであろうか。ともかく違和感を感じる剣が降り注ぎ、時折大爆発を巻き起こす。持ち前の直感でそれらを尽く判別・回避する豊久であるが、出来ることはそれまでである。
サーヴァントとしていくら素の能力が向上していようと、流石に見えもしない敵を逆狙撃するのは至難の技だ。
そもそも豊久の遠距離攻撃手段は、腰に据えられた命中精度の低い馬上筒のみ。生前も狙撃というより至近距離で瞬間火力を押し付ける形での運用が主だった。
鷹の目を誇る弓兵相手には些か以上に分が悪い。
「シィッ――!!」
故に、豊久は迷わず撤退を選択した。

波平を振るって手近なビル群を切り倒すと、もうもうと撒き上がる土煙の中へ身を踊りこませる。
障壁と煙幕を作り出し、敵に狙いを絞らせないことを意図した行動である。
前しか向かない頭薩摩隼人だのなんだの言われる豊久だが、その実冷徹なまでに引き際を弁えている。
敵に背を向けることを恥とも思わぬし、必要ならば飛んで跳ねて逃げ回る。そうしてやがて、来たる勝利への布石とするのだ。
(面倒な敵兵(やつばら)じゃっどん、そいでこそ首ん掻き甲斐ばあっど)
爛々と眼光を輝かせ、素早く建物の影に身を潜らせる豊久。その覇気は、どこからどう見ても撤退真っ最中とは思えぬほどに獰猛だった。

「……馬鹿な」
爆心地から5km以上離れた、一際高いタワーマンション。
その屋上に弓兵が立っている。
剣(矢)を番え、いつでも獲物を撃ち抜ける態勢のままで撒き上がった目眩しを注視する。
(それで姿を隠し、あるいは身を守ったつもりか?だが、甘いと言わざるを得んな)
煙幕を焚いたとて、それは空気の流れを視認できるようにする。

建物の残骸を盾にしたとて、今以上の威力をもって撃ち抜けば事足りる。
逃げたつもりが、袋小路に飛び込んだも同然。
事実、既にアーチャーの双眸は惑うことなく敵の影を捉えている。
それでも弓兵…シャドウサーヴァント・アーチャーは慢心を起こさない。
「我が骨子は捻じれ狂う（I am the born of my sord）」
それが引き起こす最悪の結末を身をもって知るが故に。それを突くことこそ己の領分であるが故に。
そう、油断や慢心など存在しなかった。
付け入る隙を与えず、己の間合いで完膚無きまでに封殺するという戦略を、何の支障もなくアーチャーは遂行していたのだ。
彼に誤算が、もしくは不運があったとすればそれはただ一つ。
敵対者（ドリフター）が、窮地を覆す専門家であったことだ。
（っ、煙が晴れる？いや、晴らしている？今更姿を晒して、何を…いや待て、奴は何かを言っている！）
類稀なる視力を持つが故に、アーチャーはそれをはっきりと視認した。視認してしまった。
物陰から出で、ぎらりと笑う戦餓鬼の口元を。

（そ　こ　に　お　れ）

「ッ!?!?!?」
戸惑いも恐怖も、感情の類を覚える前に身体が動いた。
赤い光を迸らせ、魔力を込めて練り上げた必殺の矢が宙を裂いて飛んでいく。
だがその必殺は敵を貫く事はなく、唐突に生えてきた石の壁にぶちあたって大爆発を巻き起こした。
「偽螺旋剣（カラド・ボルグII）を防御だと!?増援かっ!!」
光に飲まれて周囲の状況が目視できない中、宵闇をつんざくのは咆哮。

「おぉおおおおおおッッッ!!!」
光と煙の中を突っ切り、５ｋｍはあろう距離をぶち抜いて眼前に現れたるは猩猩緋の武者。
「な」
「大技には必ずある、そん派手な鬨の声ば待っとったど！」
（偽螺旋剣の魔力の放出から、こちらの位置をっ…）
だとしてもどうやってあの攻撃を凌いだ？
増援ならどこに隠れていた？
そもそもどうやってここまで飛んできた？
次から次へと疑問が湧いてはアーチャーの頭を埋め尽くすが、敵はそんなものを待ちはしない。
殺人的な加速を得た飛び蹴りが腹にめり込み、堪らず血反吐をぶちまける。
「ごぼッ…がっ、ぁ……！」
飛びかける意識の手綱を必死で手繰り寄せ、受身を取るがアーチャーの身体は既に屋上の柵を破り、中空へと投げ出されていた。
「ぜぇぇぇぃ!!」
「！」
殺気に反応し、咄嗟に双剣を交錯させたアーチャーの腕に凄まじい圧力が伸し掛かる。
鉄塊で押し潰されたかと思う程の重さだが、それが単なる斬撃だと気が付いたのは、殺しきれなかった威力により地面に叩き付けられた後のことだった。

アーチャーに肉薄し、一撃を喰らわせた豊久は瞬時に次の行動に移行した。
（まだぞ！奴ん目ば死んどらん！）
交した刃ごしに突き合わせた敵の瞳からは、戦意の炎が消えていなかった。それを証明するように空中を落下する豊久を狙って無数の剣が殺到している。
それら全てを弾きながら、左腕を腰に回す。掴んだのはかの猛将、徳川四天王が一人、井伊兵部少輔直政を撃ち落とした馬上筒。
目当ても付けずぶっ放すが、その時地面を覆うように華の天蓋が咲き誇った。
「熾天覆う七つの円環（ローアイアス）！」
展開された8枚の花弁を3枚散らしたところで、豊久の放った銃弾は打ち消された。
だがアーチャーが全意識を防御に集中した隙に、豊久は既に得物に魔力を込め終わっている。
豊久の体重、落下速度、そして魔力（殺意）を載せた野太刀の切っ先は容易く残りの盾をぶち抜いていく。
「ぐ、おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」
だが敵もさるもの、掲げた左腕から血をまき散らしながらも右腕には既に剣が握られていた。
最後の花弁が砕け散るのと同時、豊久とアーチャーは再び交錯する。

ずるり――――

「……不快だな。功名を得て何が変わる。首級を挙げて何になる？貴様は一体、何がしたい。あの小娘に付き従い、世界を救うか？」
刀を振り抜いた姿勢のまま、背中越しに問いかけられる疑問。
「おいは所詮は戦餓鬼。寝てん覚めてん、何処に行ってんそいしかなか。首級を奪らねば、只の木偶よ」

「はっ…愚かを通り越し…憐れ、だ…な…

背後で肉が崩れ落ちる音を聞きながら、豊久は今度こそ血糊を払い刀を納めた。

『立香ちゃん！・マシュ！・それに所長、サンジェルミ伯爵！・皆無事かい!?』
「これのどこが無事に見えるの!!シャドウサーヴァントには襲われるし藤丸がイカれたサーヴァント召喚するしかと思ったら急に気絶するし現地のサーヴァントと共闘することになるし気色悪いオカマがいるし!!何ひとつとして無事じゃないわよ!!!」
　空中に浮かんだディスプレイに向かい、オルガマリーが怒声を浴びせかけている。しかしその声音は先程までのヒリついたものとは一線を画し、子供が癇癪を爆発させたかのようなある種微笑ましいものだった。
『あ、あはは……いやまぁ、伯と無事に合流出来たみたいでその点は良かっｔ立香ちゃんが気絶!?』
「反応が遅いですドクター、張り倒しますよ」
『うわぁん、マシュが辛辣！・そんな子に育てた覚えは…いや今はそれどころじゃない！立香ちゃんの容態は!?』
　セーフポイントに辿り着いたことで僅かに気が緩んだか、はたまた通信越しとはいえ見知った顔を見て安堵したか。
　一気に騒がしくなるカルデアの面々を尻目に、サンジェルミは一人眉間を揉んでいる。
（リツカの昏倒……疲労か、魔力の枯渇か、或いはその両方か。トヨちゃんは派手にドンパチやってたみたいだし、そっちに魔力吸われたかしらね。あっちの世界でも魔法覚えず素の能力で立ち回ってたあの子が、語り継がれたとは言え英霊になっていきなり魔力適正ぶち上がるとは思えない。十中八九Ｅランクでしょうね）
　豊久は魔術の才能に劣る…というレベルを遥かに下回り、欠落していると言って過言ではないであろう。
　そんな彼が離れた距離からでも分かるほど派手に魔力を放っていたのだ。

自前で賄えない魔力を、どこから持ってきたのか。
考えられるのは、相手の魔力を吸収したか、マスターである立香から吸い上げたかという二つに一つである。
彼の生前の能力、功績を鑑みるに前者の可能性は限りなく低い。恐らくは立香の昏倒は豊久による魔力の吸収が原因であろう。
「厄介だわね…。リツカの魔力最大容量はお世辞にも褒めれたモンじゃない。トヨちゃんがいくら強くても、一々マスター気絶させてたんじゃ世話ないわ。ぬぐぐぐ……このコスパの悪さは問題よ……」
なんかあっちで髭眼帯と知り合った頃から常に気を揉んでないか。
いつになったら気楽に化粧して美少年漁ってヴェルリナ二丁目に店を構えることができるのか。
そんな詮無きことを考えながら、錬金術師はまた一つ溜息をつくのだった。
「首ば奪ってきたどー！」
と、噂をすればなんとやら。
それはそれは清々しい笑顔を浮かべた緋武者が、ブンブンと腕を振りながらこちらへ駆けてくる。
「大英雄サマのご帰還だな」
「は〃ぁ〃ぁ〃ぁ〃ぁ〃……トヨちゃんに事情全部説明して、やること言い聞かすのが1番めんどくさい……アンタもちょっとは手伝いなさいよね」
「オレが話すのか？問答無用で切りかかられるのがオチなんじゃ…いや待てアイツ鯉口切ってるやべオイ待て止まrあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

声が聞こえる……明るくて、賑やかで、暖かくて…私を呼んでいるような…。
縫い付けられたように重い瞼を無理やりにこじ開け、私はゆっくりと意識を覚醒させていく。
頭は鈍痛に襲われ、胃はかき混ぜられたかのような不快感を訴えている。それでも起きなきゃいけない。今起きなきゃ、大変なことになる気がする。ここで起きなければ、一生後悔するような――――
「ん……」

「で、結局おまぁは味方か」
「さっきからそう言ってんだろ!!オレが言うのもなんだがテメェマジで人の話聞かねぇな!ケルトの血がどっか混じってんじゃねぇのか!?」
「話聞かずに自分の子供殺した男の言は重いわねぇ」
「ライン越えだそこの男女ぶっ殺すぞォ!!」
「こここ殺し合い!?嫌だやめてよちょっと、また話拗らせないで頂戴!あぁもう全部妖怪首置いてけが悪いのよ!!」
「落ち着いて下さい所長!今のは１００％フルスロットルでサンジェルミ伯が悪いです!」
『そうだよオルガ、怒鳴り散らしても問題の解決には…』
「戦場におなご放りこんじ、遠目に見ちょっだけの弱卒(やっせんぼ)は黙っとれ」
『フォローしようとしたのに!?!?もしかして僕終始こんな扱い!?』
「喧しいですドクター、怒りのあまり通信を切りたくなる前に黙って下さい」

「泣くぞ!?しまいには泣くぞ、大の大人が全力で！」

あ、私呼んでるってツッコミ的な意味で？ブレーキ役的な意味で？
賑やか通り越して五月蝿いし暖かさ通り越して炎上寸前だし、いや確かにこれ今私起きなかったら色々手遅れになりそうだけども。
「あぁ!?首置いてくかてめぇ！」
「上等だよ杖で殴り殺してやろうか田舎モン！」
「殺ス!!」
「あーなんかなついわーあの3人の取っ組み合い思い出すわー」
「浸ってないでどうにかしなさいよぉ！もう誰か助けてぇ!!レフぅぅぅ!!!」

「ツスゥ――……もう一眠りするかぁ」
『いや立香ちゃん起きてるよねぇ!?現実逃避はさせないよ!?』
「チッ」
不本意ながら、ほんっっとうに不本意ながら意識を覚醒させた私の目に飛び込んできたのは中々強烈な光景だった。
ドクターは半泣きだし、所長はべそかいてるし、マシュはなんかツンツンしてるし、ジェルミさんは生暖かい目でニコニコしてるし、豊久さん、は……
「豊久さんッ!!」
「おう、起きたかます……なんじゃなんじゃ、おいはおまぁのおやっどではなかぞ」
にっかりと笑う豊久さんの顔は煤け、汚れているが目立った傷はない。
彼の無事を確認した途端、思わずその大きな懐へ飛び込んでしまっ

た。嫁入り前の女がはしたない、なんて言われるかと思ったけど、豊久さんは茶化すように笑うとくしゃりと頭を撫でてくれる。ゴツゴツと硬い掌は、不思議と私に安心をもたらしてくれた。
「ごめん、ごめんなさい…私達だけ逃げてごめん…1人だけ…」
「そいは違(ち)ご」
「えっ？」
短いけれど、力の篭った否定。その重さに思わず顔が跳ね上がる。
「大将ば守るんは兵子の責、兵子の誉ぞ。そげん兵子に大将が投ぐっ言葉は謝罪ではなか」
そんなことはない、命を投げ出さないで…そんな言葉をかけるのは簡単だろうが、それを言ってはいけない気がした。
それは彼自身の生き様を、英霊としての在り方を否定してしまう気がして、どうしても言えなかった。
「…うん。ありがとう、豊久さん。殿(しんがり)、ご苦労さまでした」
「うむ！恐悦至極！」
そう言って、再び子供のように笑顔を弾けさせる豊久さん。
……なんか、吸い込まれそうなくらい綺麗な笑顔だなぁ。じっくり見ると顔立ち整ってるし…体も大きいし、あったかいし、安心するし…ふざけて自分でお父さんじゃないって言ってたけど、なんかほんとにこのまま甘えてたいような……
『あのぅ……』
「ひゃいっ!?!?」
『仲睦まじくしてるところ悪いんだけど…そろそろ話進めていいかなぁ？』
カルデアに戻ったら、取り敢えずドクターをしこたま殴って記憶を飛ばそうそうしよう。
固い決意を胸に秘め、私はよろよろと豊久さんから離れるのだった。

そして始まった作戦会議。
豊久さんが1人奮戦し、私が眠りこけていた間に結ばれた同盟の件も含めて情報共有がなされていく。
「アンタらの目的は特異点の修復。オレの目的は聖杯戦争を終わらせること。つまるところ、やることこた同じだ。セイバーをぶっ倒して聖杯を手に入れる。これに尽きる」
「そんせいばぁ以外には敵はおらんのか」
「汚染されてるがバーサーカーが残ってるな。まともにやり合うだけ損だ、無視してセイバー本人を叩いた方が良いだろ」
ここで私と所長、マシュが目を見合わせる。
若干一名、嬉々としてそのバーサーカーの所へ突っ込んでいきそうな人が荒ぶるのを心配したのだが…
「ほうか。雑兵にかまけて大将首ば逃がすんは愚の骨頂、向こうが来んならそいでよか」
意外や意外、豊久さんはすんなりとバーサーカーのシカトに賛同した。まっさきに「そいつの首も纏めて取る！」とか言いそうなのに。
「ないだァ、そん狐につままれた面ァ！」
「いやだって…ねぇ？」
「島津さんは戦場の命を全て刈り取らねば気が済まないタイプかと…」
「バーサーカーもどぎがまともなことを…」
「ばぁさぁかじゃねぇって言ってんだろ！どりふたぁじゃ、どりふたぁ！」
「自分の能力も分かってない猿頭英霊なんてバーサーカーもどぎで充分よ！」
エクストラクラス、漂流者（ドリフター）。

本来聖杯戦争に喚ばれる七騎に該当しない特例が、豊久さんのクラスだという。
私は勿論のこと、マシュや所長、果てはドクターまで聞いたことも無いかなり珍しいクラスらしい。いやまぁ魔術師が知らないのも中々厄介だけど、同じサーヴァントのキャスターすら心当たりないってどういうことよ??
実際どのような特殊能力を持っているのか所長が問い質したところ、
『英霊ち大層なもんになって喚ばれるんは初めてじゃっで、おいもわがんねぇ』
とのありがたいお言葉をご本人から頂きヒステリーが再爆発したのはまた別の話。
纏めると、現状分かっているのは以下の点。
その1、豊久さんは近接メインの中距離ギリギリ。
その2、単独行動可能、ただしその際の魔力は私(マスター)から自動吸収（と思われる）。
どっしり構えて大技ぶちかますというより、突っ込んで敵を掻き回すといった遊撃戦法が豊久さんの持ち味のように思える。
私達をひとつのパーティとして見ると、正直マシュとの相性が悪い。
無い知恵絞ってわたしが考えていたのは、マシュに矢面に立ってもらっている隙にアタッカーが魔力を貯め、チャージ完了と同時にマシュが退いてブッパという脳筋戦法。
縦横無尽に駆け回る豊久さんをマシュがかばいながら戦うのは相当無理があるだろう。
しかしそれ以前により大きな問題がひとつある。
「あそうだトヨちゃん、アナタちょっと魔力セーブなさい」
「あぁ!?」
「いやそれについては面目次第もありません…」
そう、1番の大問題はこれなのだ。
豊久さんの力を十全に引き出すには、私の魔力量が貧弱すぎるとい

う致命的な問題。ドクター曰くカルデアとの通信が安定し、私との間により強固な魔力パスを流せれば解消の目があるらしいが現状それは難しい。
　ロクな準備も出来ずに飛ばされたこの特異点では、カスみたいな元々の私の魔力でどうにか賄うしかないというわけだ。
「アナタが張り切りすぎてリツカがいちいち倒れてちゃ世話ないでしょ。幸いこっちには原初のルーン持ち魔術師が付いたんだから、トヨちゃんが張り切って宝具だのなんだの使わなくても中遠距離はカバーできるわ」
「ま、そこらへんは専門職にお任せあれってな。お前がシャドウサーヴァント共を片っ端から潰してったおかけで、こちとら殆ど消耗しちゃいねぇのよ」
「ないごてみすみす手柄ば譲らねばなんねぇ!?」
　なおも言い募る豊久さんだが、私が頭を下げまくったことでなんとか納得してくれた。ほんとごめんなさい…へっぽこマスターですいません……

「それにしても…バーサーカーもどぎは全力を出せず、キリエライトは宝具を使えず。正直かなり厳しいわね……」
「っ…」
『オルガ、君はただでさえ人に誤解を与えやすいタイプなんだからもっと言葉を選んだ方がいいよ。……まぁ状況が厳しいという認識には、正直賛同せざるを得ないけども』
「あに死体蹴りしてんのよ、これだからモテないのよ独身アラサー童貞は」
　どどど童貞ちゃうわとドクターが絶叫し、所長が不潔だ最低だと喚き散らす中で、マシュはやはり拳を握り締めて震えていた。
「マシュ…」
　何か言葉をかけなければ。そう思うが、想いは喉に詰まって出てきてくれない。
　結局、喧騒の収拾が付かなくなったことでその場はお開きとなり、

夜明けの出発まで休息と相成った。

霊脈からほど近い、半壊した校舎。セーブポイントとして選ばれたその屋上で、マシュは1人立ち尽くしていた。
「ここにおったか」
「島津、さん……」
ズンズンと歩み寄り、隣に立つ偉丈夫。マシュは無意識のうちに、彼に羨望の眼差しを向けていた。
「本日はお疲れ様でした、島津さん。お見事な武働き、私も見習わなくてはと…」
「何を焦っちょる」
前置きも探りも何も無い直球。
優しさや思いやりというより、本当に疑問だけで聞いているかのようなその無遠慮さがかえってありがたい。
くすりと笑みをひとつ零すと、マシュはぽつぽつと心中を吐露し始めた。
「自分が不甲斐ないんです…道を切り開く力もなく、マスターの守護すらままならず…挙句の果てに英霊としての本分である宝具すら使

えない…」
曰く、英霊が築き上げた伝説の象徴。
曰く、サーヴァント達の生きた証。
曰く、その解放は伝説の再現。
そんなサーヴァントにとっての「当たり前」をマシュは使いこなせない。
デミ・サーヴァントだからとか、力を譲渡してくれた英霊の名が分からないからとか、事情は諸々あるのだがそれを一切口に出さなきあたりマシュの生真面目さが見て取れる。
「島津さんに比べたら、私は先輩や皆さんの重りになるばかりです。この身の価値は……」
「阿呆抜かすでなか」
否定の言葉は、けろりとしたものだった。
あまりにも真っ直ぐすぎるその言葉に、遠くを見つめていたマシュの瞳が思わずそちらに吸い寄せられる。
「右も左も分からん戦場でん、そん盾ば振るうてますたぁば守ったはおまぁではなかが」
「で、でも私は島津さんのようには…」
「おいは人を守れん。首級を挙げるこつしかできん。後ろのことなぞなんも考えず、たンだ突っ込むこつしか能がなか。じゃっどんおまぁは違う」
そこまで言って、豊久は漸くマシュへと顔を向ける。
そこにあったのは励ましや導きの意志などではなく、ひたすらに純粋な兵子への畏敬。
「藤丸立香の御身を、御心を、傍で守るはましゅ・きりえらいとにしか出来ん。じゃっで頼んど。わいらん主ば守ってくいや」
ろまにがメシば送って来たど、という言葉を残して豊久校舎の中へと姿を消していった。
（――――しまづとよひささん）
尚も屋上に立ち尽くすマシュの胸に最早先程までの焦燥は無い。
代わりに残ったのは、無遠慮で不躾で、それでも真っ直ぐ人のこと

を見てくれる1人の不思議な男への感情。
世間知らずな少女には、それへの理解は未だ難しく。
「島津、豊久さん…」
吐息にも等しい小さな声が、宵闇に紛れて消え去った。

「ドリフターよぉ…確かにガッツのある健気な嬢ちゃんとは思うが、あの年頃の娘に粉かけるのはどうかと思うぜ…」
「くっ、こんなことならやっぱりヴェルリナで適当な王妃連れてきて性欲の捌け口を設けておけば…！」
「ひっ！よらないでケダモノ、不潔よ不潔！」
「全員殺ス!!というかなんで聞いてんじゃ貴様(きさん)らぁ!!!」

道

一夜明け、私達はキャスターの案内でセイバーがいるであろう場所へ向かっていた。
道中雑魚の群れには幾度か遭遇したが、何やら吹っ切れたらしいマシュや流石の手並みを見せるキャスターの前には大した障害にはならない。
唯一力をセーブさせられて思うように首奪りができない豊久さんの機嫌だけが懸念事項だったんだけど…
「なんち!?けるとにはそげなぼっけもんば仰山おるのか！」
「おうともよ！どいつもこいつも見栄と武功と、酒と女の事しか頭にねぇ大馬鹿野郎共よ！だが好きだろう、そういうどうしようもねぇ馬鹿な勇士は！」
「薩摩にもおるど！いや、薩摩にはそいしかおらんど！前しか向けん血迷うた兵子しか！」
「命なんざ二の次でよ！相手が誰だろうがてめぇの道理を押し通す！」
「勝ち目なぞなかに、意地で槍ば引っ掴んで駆けたりの！」
「「ガハハハハハハハ!!!!」」
わろてる、なんかわろ!!てる。私達が進んでる洞窟の中にすんごい笑い声反響してる。
いや意気投合し過ぎでしょ。ファーストコンタクトで殺し合いに発展仕掛けてなかったあなた達？
何？ひと昔前のヤンキーなの？中々いいパンチ持ってんじゃねぇか、へへお前こそ的なアレ？
「蛮族ズはどこでもいつでも気が合うモンなのよ。気にしたら負け、スルー安定だからもう考えるだけ無駄」
すごい、ジェルミさんすごい実感籠ってる。目が死んでるし心做しか髪の毛がしおしおになってる……。
「何時までも馬鹿話してるんじゃないわよ、そこの蛮族２人組！特に

青い方、道はこっちで合ってるんでしょうね!?」
所長のヒステリーも絶好調。
でもなんか、これに関してはむしろ良い気がする。所長は多分責任感とかが強すぎて精神的に潰れちゃうタイプっぽいし、こうやって遠慮なく吐き出して発散する先があるのは悪いことではない…のかな？まぁキャスターと豊久さんは大変だけど。
「そうカッカしなさんな、オルガマちゃんよ。1回特攻かけた時にルーン刻んどいたんだ、道に間違いはねぇ」
「がなってん、道ば縮まっ訳ではなかぞ。喉潰れっ前にやめい」
「だ、れ、の、せ、い、で！こんな怒鳴ってると思ってるの!!!」
いや前言撤回、豊久さんはともかくキャスターは楽しんでるわこれ。おもっくそ弄りがいのあるおもちゃ見つけた顔だあれ。
『はは、鬼のオルガマリーも形無しだなぁ』
「はっ倒すわよロマン…！」
『いやごめんごめん、でも長らくオルガを見てきた者としてはちょっと嬉しい気持ちもあるんだよ。口を開けばキツいことばかりで相手に反論の余地すら与えなかったぼっちの帝王がこんな軽快なやり取りを…感慨深い…』
「取り敢えずあなたが雪山に1人でほっぽりだされたいっていうのはよぉく分かったわ……」
「お、ついでに着てるもの全部剥ぎ取ろう」
『立香ちゃん!?』
なんてやり取りをしながら歩くこと小一時間。
それまで狭かった道が急に開け、外界からの光が出口から注いでいる場所へと辿り着いた。
「さて、ここからが正念場だ。肝心要の聖杯を守ってんのは最優のサーヴァント・セイバー。その中でもありゃ別格だな。お、言ってるうちにおいでなすったぜ」
ガシャリ、ガシャリ。
甲冑が擦れる重曹な音を響かせ、それは姿を現した。
あまりの魔力量が体内に留まらず、紫黒の粒子となって立ち上る。

まさに魔力が…いや、暴力が人の形を取っているとしか思えない。
冬木における特異点、その最後の生き残りのサーヴァント。
「問おう。貴様が、それのマスターか」
騎士王、アーサー・ペンドラゴン。

「あぁさぁ王？知らん。聞いたこともなか」
時は少し遡る。
セーブポイントからの出立前、最後の打ち合わせの席上でのことだ。
「そりゃおめぇはそうだろうよ。現代においては世界一有名つっても過言じゃねぇ王様だ。偉大なるブリテンの王、その手に携えるは勝利を約す選定の剣…」
「エクス、カリバー…」
わなわなと所長が口を震わせるが、それも無理はない。だって、私ですら知っているビッグネームなのだ。
持ってれば勝ち確というチートもいい所な愛剣、エクスカリバーに加えて更に厄介なのはその鞘。あらゆる傷を癒し、事実上の不死を得られるというもうどうやって斃せばいいのか教えて欲しいレベルの英雄だ。
「約束された勝利の剣…私の盾で、防ぐことは可能でしょうか…」
まさに世界最高と言っても過言ではない英雄を向こうに回す。

後ろから指示を出し、ボケっと見ていることしか出来ない私ですら冷や汗をかいてしまうのだ。マシュの感じる恐怖はどれほどか…。
「嬢ちゃん1人に矢面に立てたぁ言ってねぇ。無論3人がかりだ。それでも大分厳しいとは思うがな。それで良いな、シマヅ」
「戦ん習いじゃ。卑怯卑劣は言いっ子なしぞ。じゃっどん、そん王ちうんはそげに強がか？」
「さっきも言ったでしょ、トヨちゃん。英霊は知名度に応じてその力が強くなる。１５００年後のこの極東の島国で誰もが名前を知ってるのよ、そりゃ手に負えないわさ」
『サーヴァントとして、最高最優と言っても過言ではないだろうね。通常の聖杯戦争を勝ち抜くことはわけない程度には厄介な相手だよ』
眉間を揉むジェルミさんに、通信越しに沈痛な声を漏らすドクター。
暗い雰囲気が場を包む中で――
「くはッ」
ただ1人、豊久さんだけが破顔っていた。

その笑みが、不遜蛮勇と謗られて然るべき気勢が。

私の心を心地よく撫ぜたのだ。
「……それ、って誰のことかは知らないけどさ」
だから私は立てる。目を逸らさずに言葉を紡げる。
「私の仲間をそれ呼ばわりするアバズレが、彼のアーサー王とはガッカリだよ」

無理矢理にでも不敵に笑って、鬨の声を挙げられるのだ。
「バッッッカじゃないの藤丸アンタぁ!?!?あぁもうどうにでもなれ!!倒すわよ騎士王!!」
「着々と毒されてんじゃないのよ!でもやっぱ嫌いじゃないわ、昔思い出すからね!」
ごめんごめん、そんな怒らないでよ。
でも所長気付いてる?所長の顔も、ジェルミさんと同じくちょっと笑ってるんだよ?
「良くぞ吠えた藤丸立香!!ここでこの戯けた聖杯戦争を終わらせる!」
「はい!それだろうがあれだろうが、私は先輩のサーヴァント!必ず勝ちます、守ります…!」
キャスター、マシュ。辛いとこ押し付けちゃうけど、ごめんお願い!
一緒に勝とう、一緒に帰ろう!
それに豊久さん、あなたがいれば……!!
「まぁた女子か!!なんじゃおまぁ、最強の王ん首ばもいじゃろうとすごんじょったおいが間抜けではなかか!あぁもう訳ん分からん、ないごて南蛮人は女子がこげに戦場に出る!舐めちょるのか、あァ!?」
「「「「は?」」」」

「お前の首など要らん！去ね！聖杯置いてとっとと去ね！」

「「「「「ハァ――――――――ッッッ!?!?」」」」」

思えばこの時、私はどこかで甘く見ていたのかもしれない。

徹頭徹尾空気を読まない、島津豊久という英霊の病気（特性）を……。

ゆるぎないものひとつ

「わても戦に出たかっ!!」
「はン？」
　間断なく空を裂いていた木刀の軌跡が、ふいに止まった。
　呆れかえって振り向いた少年の視線の先には、縁側に座りながら足をブラつかせる幼馴染の笑顔がある。
「叔父上んごたる将になりたかち分不相応なこつは言わん！じゃっどん、槍働きにてそんお助けばしたかっ！豊ばかり初陣ば済ませずるかど！」
　ぶおんぶおんと鍛錬用の薙刀を頭上で振り回す馬鹿の身体は、なるほど鍛え上げられ大人に見劣りもしない。健康的に日に焼けた肌からは若々しい生命力を感じさせ、言葉の通りに今にも駆け出していきそうな勢いである。
「……」
「なんじゃその顔ぉ！」
「フッ」
「ぶち殺しやっど糞餓鬼」
　するりと薙刀の切っ先を躱し、少年は改めて一個歳上の幼馴染を睨め回した。
　道着の上からでも分かる筋肉に、がっしりとした身体付き。
　そして、隠しようもない女としての象徴。
「こ、今度ぁなんじゃ！そげにジロジロわてん体ば見よって……嫁にゃ貰われてやらんど！ぬしゃにだけは絶対にごめんじゃ！」
「おいかて金吾叔父上に頼まれてもごめんぞ!!……そもそも、おなごは子ぉば産み育てるが戦じゃろうが。わいらが幾ら首級重ねてん、兵子が育たねば話んならん」
「わては身体が強か！父上が戦に出れん分、わてが代わりに祁答院衆ば率いっ！猿と戦になっかもしれんちうのに、武庫叔父上と中書叔父上にばかり任せては未来の島津四兄弟ん恥じゃ！」

「未来てなんじゃ未来て」
「太守さぁは養子の久保！武庫叔父上はまだ幼かが忠恒！中書叔父上は豊と皆跡取りばおるではなかが！こいで、父上の跡を継ぐわてで未来の島津四兄弟じゃ！」
　兄弟じゃのうて従兄弟じゃろう、などと言おうものなら再び薙刀の刺突が飛んでくる。
「最近はおまぁばかり名ば挙げてずるかど！沖田畷でん、又七どんが侍首挙げたち皆お祭り騒ぎじゃったど。ずるかずるか、わても首欲しかーーーー!!」
　仮にも姉貴分を自称する阿呆が地団駄を踏んで悔しがる様を冷めた目で見つめ、少年は……いや、島津忠豊は木刀の素振りを再開させた。
「絶対、ずぇぇぇっったいに、京人ん首ば山ほど挙げておまぁに吠え面かかせちゃる！じゃからそいまで」
「死ぬど」
「ッ……」
「おいは死ぬ。手柄ば挙げて、首塚築いて、敵を道連れに黄泉路へ走る。それが兵子、それがおい。島津家久が息子の務めじゃ。お前ん務めは子ぉば産み、強か兵子を育て、金吾叔父上の血ば残すこっじゃろう。そいがお前の戦じゃ。お前が死地を駆けるはお門違いぞ」
「……だから、おまぁにだけは嫁入りしとうなかじゃ。こんバカトヨ」
「誰がバカじゃ!!」
「おまぁしかおらんじゃろこん馬鹿！頑固！猿頭！」
「首ば引きちぎっどアホチカ!!」
　姦しくも、かけがえもなく燦然と彩られた原風景。
　だがそんな長閑な日々は唐突に、残酷に終わりを告げる。

『……おいは間違うちょったか』
『若さぁ……』
『殴り飛ばしてでん止めるべきじゃったか。そいとも、こいでチカは

本望じゃったんか。分からん。皆目分からん。……そいでん、一つだけ分かっど』

『あれを誇って晒す武士なぞ……犬畜生にも劣る非人じゃ』

爆発的な勢いで繰り出される人外の斬撃を、赫を纏った波平が真っ向から迎え撃つ。

刃噛の火花に照らされた金色の瞳に反射するのはどこまでも冷めた豊久の顔だ。

「お前の首などいらねぇち言ってんだろ！」

「それはこちらとて同じこと。貴様の如き雑兵に用はない。故に、疾く散るが良い」

一撃一撃が絶死。

人の首など容易く飛ばし、どころか岩石すらも両断するであろう斬撃を、豊久は弾き、いなし、時に躱して距離を取る。

「オレらを忘れちゃいねぇか、セイバー!!」

「ちっ！」

セイバーが追撃の体勢に入りかけた絶妙なタイミングで、青の突風がその背中に襲いかかった。

常人ならば間に合わない杖の刺突を、セイバーは剣から魔力を放出

することで無理やり身体の方向を転換・迎撃。
まさにジェット噴射の如き勢いの一撃に、キャスターの攻撃はあっさりと叩き落とされた。
「トチ狂っても、そのデタラメな戦い方は健在か！嫌んなるぜ全く！」
「そう言う貴様も、クラスが変わって尚馬鹿の一つ覚えの吶喊とはな」
「一つ覚え？は、それこそ馬鹿言いやがれ、森の賢者を舐めんじゃねぇよ！」
キャスターの言葉に応じるようにエクスカリバーの刀身から木の枝が伸び、セイバーの腕と身体を絡め取る。杖と打ち合った部分を起点として、凄まじい速度で成長する木の枝は瞬く間にがんじがらめの檻の如き様相を成した。
「賢しらな、この程度で私を封じたつもりか」
その檻も、セイバーの黒き魔力に灼かれて次第に崩れかけていく。
しかしその様子を見て尚、キャスターの顔から笑みが消えることはなかった。
「だから言ったろ、忘れてねぇかってな！かませ、嬢ちゃん！」
「はぁぁぁぁぁぁぁっっ!!!!」
半ば焼け落ちた拘束ごと、突っ込んで来たマシュの盾がセイバーを吹き飛ばす。
轟音と共に真横一直線にカッ飛んだセイバーの身体は、壁に打ち付けられ、だけでなくめり込んで破砕音と土煙を巻き起こした。
「ふぅ……オイ、ドリフター！お前なぁ、聖杯戦争に好き嫌い持ち込むかフツー！オレだって女は殺さねぇと決めちゃいるが、この戦争に首取るに値しないヤワな女なぞ喚ばれやしねぇよ！しかも世界の危機だろ、この状況！」
「強かろうが弱かろうがおなごはおなご。そいに、これは好き嫌いではなか。おいの法度じゃ」
「あぁちくしょう、おめぇやっぱ最高だなこの大馬鹿野郎！」
「褒めちょるんか貶しちょるんかどっちじゃ！」
「どっちもだ!!」
「っ、適正反応未だ消滅を確認出来ず！来ます、お二人共！」

怒鳴り合う2人をマシュが制止した瞬間、黒い光が土煙を裂いた。
煙が晴れた後にあるのは、悠々と歩を進めながら血混じりの唾を吐き捨てるセイバーの姿。
傷は見えるが、大したダメージが通っていないことは聖剣から迸る魔力から一目瞭然である。
「どうしてもアレを殺す気はねぇか。テメェにその気がなくとも、奴は聖杯の前から退かねぇしテメェの主を躊躇なく殺しに来るぞ」
「火の粉ば払う。じゃっどん首は奪らん。そいだけぞ」
「喚ばれたのがまともな聖杯戦争じゃなくて良かったなぁ、逆に…」
軽口を叩く合間にも、セイバーは止まらない。彼女の姿がぶれ、黒い閃光が走ったその瞬間。
幾度目かも分からぬ火花が激しく散った。

島津豊久という人間は、異常という評価を下されやすい。
その思想、その行動原理、その在り方、ありとあらゆる彼の構成物は周囲の人間にとって理解しがたいものに写る。
だがその実、彼は狂ってもいないし精神が歪んでもいない。
彼なりの論理が、道理が、信義が存在し、それに則って行動しているのみなのだ。
ただ、その自身の「我」を、いついかなる場所においても押し通す。
ここがどこか、相手がだれか、状況はどうか。
常人ならば、いや人ならば誰しも持つであろうそんな思考は彼の中に存在しない。
世の理があるだろう。

人皆それぞれ義があるだろう。
信じるものがあるだろう。
理解はしている、肯定すらする、されどその上でそれら全てを薙ぎ払う。
それは英霊としてではなく島津豊久という人間の本質。
己を貫く頑徹さこそ、かの漂流者の最大の武器である。
(それが、それこそがサーヴァントという存在では決して太刀打ちできない災厄の、その間隙を突く鬼札足り得る。だからあなたを喚んだ。あなたを選んだ)
混乱に包まれる戦場の中で、錬金術師は目を細める。
呆れ、怒りながらもそれでこそと上がる口角を抑えきれない。
「一度経験済みなんだから、ちゃちゃっともっぺん世界救ってちょうだいな」
世界にあるべき形などなく、決まった終わりもまた駄作。
故に奔り、破り、穿ち、潰せ。
世界を掻き回せ、漂流者(ドリフター)。

Ｆｉｒｅ　Ｗａｒｓ

『すごい、すごいぞ！3対1とは言え、あのアーサー王と対等に戦えてる！しかも相手は聖杯のバックアップを受けて魔力が無尽蔵になってる状態だ！』

通信機から場違いなほど興奮したドクターの声が響く。

だがそれも無理はない。

豊久さんが飛び出て切り結び、その隙にキャスターが仕掛けを設置。敵の足が止まったところにマシュが重い一撃を叩き込むという、初めて共闘したとは思えないほどの連携がセイバーを攻め立てている。

セイバーの異常なほどの硬さのせいで伝わりにくいが、攻撃は何度も何度も当たっている。着実にダメージは蓄積している筈だ。

『これはもしかしたら、もしかするかもしれないぞう！』

魔術士として、アーサー王という存在の大きさを誰より知るであろうドクターの興奮を窘めるのは酷な話かも――――

「寝言は寝て言いなさい」

ぴしゃりとした一言は、所長のものだった。

思わず彼女の顔を覗き込むが、その瞳は私やジェルミさんを映していない。ぶれることなく、真っ直ぐに眼前の戦いへと向けられている。

「対等？どうにかなるかも？馬鹿言わないで、私達はあれを倒して、この特異点をどうにかするの。善戦程度で喜んでちゃ世話ないわ、力いれなさい藤丸、ロマニ！喜ぶにはまだ早いわよ！」

「・・・・・」

「な、なによサンジェルミ伯まで黙りこくって。私はカルデアのトップとして当然のことを…」

「いや誰よアンタ。ヒステリックキレ芸人おるがま☆あにむすはどこ

行ったのよ」
「と、豊久さんに怒りすぎて血管何本か切れちゃった…？」
「そろそろ本気でシバキ回すわよあなた達」
いやふざけてるとかそういうわけではなく。
えっ待って所長こんなイケ女司令官キャラだっけ!?確かに責任感は強いし実は優しかったりと片鱗は見せてたけど！
『ふぐぅ・・』
「今度は何!?」
『ほんとごめん今本気で感動して泣きそう…』

「いやはや、全くその通り。見違えたよ、オルガ。現実から目を背け、運命を呪い、他人に当たるしかなかった小娘とは思えない」

悪寒。
恐怖とはまた違う、原始的な嫌悪感。
その声が耳に入った瞬間、背筋をいやな電流が撫でるような耐え難い不快感が私を襲った。
「あ・・・」
「魔術師三日会わざれば刮目して見よ、と言ったところかな。くく、皮肉なものじゃないか。あれほど欲していたレイシフト適正と長としての器を、そんなザマになって一度に手に入れるとは」
高台から姿を見せたのは、つい数時間前に言葉を交わした筈の人。
だけどその時とは決定的に違う。見え方が、在り方が、存在そのものが、最後にあった時とは違いすぎる。
「レフ・ライノール…」
「これはこれはサンジェルマン伯。貴方もここへ来ていたとは想定外だよ。それにマスター候補４８番、最後の落ちこぼれ…君がイレギュラーを２騎も使役するとは思いもよらなかった。オルガの成長と言

い、君らの存在と言い、ここへ来て驚きの連続だ。私の予想をこうも次々と裏切られると……」
あれは、人を見る目じゃない。対等な存在へ向ける憎悪の視線なんかじゃない。あれは最早…
「不快極まるぞ、矮小なクソ蛆虫どもが…！」
そう、虫けら。取るに足りない格下へと向ける侮蔑だ。

本丸（マスター）の異変をいち早く察知したのはマシュだった。
あるじの周辺を取り巻く異様な雰囲気に、彼女は思わず振り向いてしまう。
「戦場で目を逸らすか、小娘！」
「!!」
それを見逃すほど、騎士王は甘くない。
硬直したマシュの首筋に聖剣が吸い込まれ――
ガキィッ!!!!
「イレギュラー…！」
赤い血飛沫を舞わせる直前、交叉した二振りの刀に阻まれた。
「重か一撃じゃのう。鋭か剣じゃのう」

野太刀と短刀代わりの打刀で器用に聖剣を挟んだまま、豊久は両腕の力を抜く。
「っ――!?」
「じゃっどん、叔父上の太刀には及ばんのう!」
豊久とセイバーの視線が交錯したのも一瞬のこと。
「どっせぇい!」
セイバーが口を開くよりも速く、その身は軽々と宙に放り出されていた。
「でかした!!」
無論、中空で受身を取れない敵の隙をキャスターが突かない筈もなく。
「猿真似以上本場未満ってなァ!!」
みしりと音が響く程に握り締めた杖から炎が立ち上り、石突がセイバーの姿へ狙い済まされる。
「『罪咎焦がす炎罰の杖(ゲイボルグ・ディグレイド)』!!」
胸板が地面に付きそうなほど低い体勢で放たれたのは、キャスターの偽称宝具……即ち、炎を撒いて奔る杖の全力投擲(今思い付いたそれっぽい必殺技)。
呪いの槍を持たずとも、クラス適正がなかろうと、クー・フーリンは戦才溢れる万夫不当の勇士である。その全力を以て放たれる一撃は、いかな騎士王とて万全でなくば受けきれない。
「がはっっっ!!!」
炎と血による赤い軌跡を描き、貫いたセイバーの身体ごと杖は岩肌に突き刺さった。
「ぎ、あ…ぐ、ぅおおおぉあぁぁッッ……!!!」
「マジかよオイ、そりゃあ滅茶苦茶が過ぎんだろッ!?」
しかしそれでもセイバーは動きを止めない。
刺し貫かれ、磔にされてなお腹部の杖を引き抜こうと力を込める。少しずつ、されど着実に杖が抜けていくさまを見て流石のキャスターの顔にも冷や汗が浮かんだ。
「終わらんッ……まだ、私は…終われないィッ!!聖杯を、選定を、今一度……っ」

大量の血と、臓物すらもぶちまけながらセイバーは大地を踏みしめる。
一刻も早くマスターの下へ駆け寄ろうとしたマシュの足が止まるほど、その姿は凄惨だった。
「ますたぁば守れ、ましゅ」
進み出たのは緋い影。
その手に握られた刀は、もう刃が返されてなどいない。
全霊の殺意と翻意をもって、島津豊久は立ち塞がった。
「どういう風の吹き回しだ？首いらねぇんじゃなかったのかよ」
「応、いらん。いらんじゃっどん、あれは介錯してやらねばならん」
その目に映るのは、最早執念だけで歩いているであろう女子の姿。生気もなく、力もなく、ただ奇跡に縋る渇望だけを宿した痛ましい姿だ。
「お節介だねぇ。この聖杯戦争が終われば、アイツはまた聖杯を求める。成し遂げねぇ限り同じく血みどろで進むぞ。サーヴァントなんてのは所詮そんなもんだ。何も変わらねぇ、止まらねぇ。てめぇの願い叶えるまで七転八倒転がり続ける残骸だ。おめぇも俺も含めて……」
「そがいなこつ、おいが知ったことか!!」

雷霆。
そう、まるで雷霆のようにその言は戦場に響き渡った。
問うたキャスターが、身体を引き摺るセイバーが、主の下へ馳せ参じようとしたマシュが、闖入者と対峙していた立香達が、そして当の闖入者さえもが。
皆その動きを止め、意識を全て持っていかれるほどの咆哮。
「島津中務少輔豊久。介錯仕る」
そんな中、豊久はひとり動き出す。
野太刀を担ぎ、姿勢を落とし、獲物へ飛びかかる直前の獣のように全身を引き絞る。

「……阿呆か、貴様」
思わずと言ったようにセイバーの口から零れた罵倒。しかしその口元は微かに笑みを象ってさえいる。
「阿呆はうぬじゃ、あぁさぁ・ぺんどらごん」
言の葉を残し、絶速の踏み込みが大地を砕いた。
決着の刻は、近い。

燃えよ剣

音を半ば置き去りにした豊久の吶喊に、セイバーは深手を負ってなお反応した。
いや、正確には反応させられたと言うべきか。
セイバーの身体への負担など度外視した魔力頼りの超反応は、その代償として彼女の傷口から泥のような血を噴出させる。
「ふっ、ぐぅあァァァっっっ……!!」
「シィッ!!!」
それを避けようともせず、豊久は波平に満身の力を込めた。
セイバーの首の皮一枚を掠めたところで、波平は聖剣に阻まれる。
文字通り血反吐を吐きながらの鍔迫り合いによって両者の魔力は飛散し、周囲の空間を歪めていった。緋と黒、二色に具現化した魔力が2人を中心に爆ぜていく。
「――――卑王、鉄槌……！極光は反転する！」
だがその様相も、セイバーの言葉と共に一変する。
それまでバチバチと断続的に弾けていた魔力が聖剣へと集約され、その刀身は赤黒く輝く。拮抗していた波平が徐々に押し返され、やがて完全に豊久が弾き飛ばされた。
「光を呑め！『約束された（エクスカリバー）』……」
逆袈裟に構えられた聖剣から、爆発のように魔力が吹き出す。
その威力は、余波でセイバーの足元が溶け落ちるほどのものだった。
「『勝利の剣（モルガーン）』!!!」
宣言通り、全てを喰らい尽くして塗り潰す、そんな黒光が豊久に迫る。
常人ならば避けようと足掻くか、それ以前に恐怖で足が竦んで動けすらしない。

されど男は、常人にあらず。

右手は柄頭を握り締め、左手は切先を載せるように添える。
重心を落とし、身体を滑らせ、必殺の宝具に錯撃を喰らわせんと豊久は牙を剥く。頬の真横を光が通り過ぎ、肉を焼く異音が響こうとも止まらない。目を逸らさない。
ただ一瞬の大振りの隙、魔力を出し切り反応もできないセイバーの刹那の間を狙って駆ける。
その技は、タイ捨ではない。示現でもなく、戦場で培った我流の刀術ですらない。
「借りっど」
それはかつて、好敵手が放った最期の一撃。
無数の流派が入り乱れる都を、銃火器飛び交う戦場を戦い抜き、血に染め……豊久を終わらせた鬼の剣。

――――盗人野郎が。

苦々しげに、しかしどこか満足気に。

吐き捨てる異装の武士（さぶらい）の姿が、刃を繰り出す豊久に重なった。

光が収まった時、マシュに庇われた私が目にしたのは抱き合う様に豊久さんにもたれかかるセイバーの姿だった。

足元にはおびただしい血痕が飛び散り、彼女の鎧も、それを抱き留める豊久さんの体も鮮血に染まっている。

「――……――……」

「――――。――。」

「……――、――――。……――……」

二言、三言。爆風にやられ、耳鳴りのする私には拾えない会話がなされるうちに、豊久さんの腕から光の粒子が立ち上り始めた。

仏頂面で、どこか痛ましいものを見るような豊久さんとは反対に、消えかかるセイバーはどこか穏やかな顔付きをしている。

ふと、彼女の視線がこちらに向いた。

（て、ば、な、す、な）

聞こえずとも分かる、口の動き。

その意味を問い正そうとした時には、既にセイバーの霊核は宙に溶けていた。
「勝っ……た、の…？」
呆けたような所長の声で、浮ついていた私の意識が漸く状況を認識し始めた。
「豊久さ」
「ふん、所詮は駒か」
その声を聴いた瞬間、忘れかけていた怖気が再び背筋を這い回る。
そうだ、まだだ。まだ、終わっていない――！
「マシュ！」
「はい!!」
最早ツーカー、指示を出さずともマシュは前へと飛び出していく。
なにやってんのと慌てるジェルミさんを尻目に、マシュは躊躇うことなく鉄塊をレフ教授へとぶっつけた。
「随分とお転婆に育ったな、マシュ。無菌室の中で朽ちていくだけのモルモットが」
「レフ、教授ッ…！」
しかし容易くそれを受け止め、レフ教授は厭らしい笑みを顔に貼り付ける。
あの視線、あの物言い、そしてあの膂力。
「人間じゃ…ない…!?」
足が竦む感覚に囚われ、無意識のうちに後ずさろうとしたその瞬間。
「置き土産だ！」
突如として地面から生えた木が、教授の身体を握り掴む。
「消え掛けの野良犬が!!」
「ハッ、らしい声も出せるじゃねぇか！偉ぶった物言いよりよっぽど似合うぜ三下！」
キャスターの声に応じ、巨人の腕の如き大木は炎に包まれる。
「おい嬢ちゃん！」
「はっ、はいぃ!?」

呆気に取られ、またまた飛んで行った意識を無理やり叩き起すようにキャスターは私を怒鳴りつけた。
「オレぁもう限界だ！野郎を仕留めきるまでは流石に保たねぇ！最後のお節介と思ってよぉく聞きやがれ！」
気付けば、キャスターの身体からも粒子が立ち上っている。聖杯戦争を最後まで生き延び、勝者となってもいつまでも現世には居続けられないということか。
「キャスター……！」
「生き延びろ！んでもってまたオレを呼べ！今度ぁ槍持った状態でな！あとオカマぁ!!!」
「何!?今ちょっとそれどころじゃないんだけど！」
炎が生み出す風に煽られ、ジェルミさんが怒鳴り返す。
「トヨヒサを死なすなよ！そいつの心臓はオレが奪る！」
「なに言いやがるクソボケが。奪られるのはおいじゃない」
笑顔を残し、消え行くキャスターに応えるように。
彼が繋いだ一隅の機を無にせぬように。
「くぅふぅりん、貴様（きさん）よ！」
豊久さんは、いつものように突っ込んでいく。
「チェストおぉぉぉぉぉッッッッ!!!!!」
焔に巻かれた大樹諸共、裂帛の斬撃が影を断ち割った。